論　説

満洲日系大学の戦後同窓会に関する歴史社会学的考察（1）

――各同窓会における満洲記憶について――

韓　美　怡

〈目　次〉

序章
第一部　満洲国の高等教育機関とその同窓会――歴史学的概観
　第一章　満洲国の高等教育機関政策と高等教育機関
　　第一節　満洲国における高等教育機関
　　第二節　関東州における高等教育機関
　第二章　各教育機関の概要と同窓会の特徴
　　第一節　戦後同窓会の規模
　　第二節　戦後同窓会の活動の特徴――輔仁会を中心に
　　第三節　戦後同窓生のキャリア――輔仁会を中心に
　　第四節　戦後同窓会と外交関係
　　第五節　語りと記憶　（以上本号）

第二部　満洲建国大学とその同窓会
　第一章 建国大学の概要
　第二章 建国大学とイデオロギー
　第三章 建国大学における反満抗日運動
　第四章 建国大学の崩壊
　第五章 建国大学の同窓会

第三部　理論的考察
　第一章 同窓会報における満洲記憶
　第二章 日本人同窓生の語りと記憶
　第三章、中国人同窓生の語りと記憶
　第四章、他の出自の同窓生の語りと記憶
結論

序章

第一節　問題意識と研究目的

日中戦争が終了してからすでに 70 余年になる。1972 年の日中国交正常化から数えでもすでにほぼ半世紀を迎えようとしている。第二次世界大戦の歴史は、現在までの日中関係にいまなお重大な影響を及ぼしている。傷ついた記憶を直視し、歴史について共通の認識と記憶を追求するべきであろう。しかし、日本による侵略を受けた国として、中国では、現在までも戦争期の解釈においては民族主義的な色彩が濃厚である。他方、近年、国際社会における保守主義の台頭とともに、諸国は自国の文化の特徴を強調し、自民族の優位性を唱える段階に戻ったかのようである。こうして政治思想の分野では保守主義への回帰が見られ、一方、経済活動分野では保護主義が台頭している。冷戦後の自由主義の曙光は今では残照となってしまった。

満洲の高等教育機関では、多様な出自の学生、すなわち日本人、中国人（満系）、朝鮮人（当時は日本国籍）、台湾人（当時は日本国籍）、モンゴル系、白系ロシア人等々が同一の大学でともに学び、同一の学生寮でともに生活していた。日本敗戦後、日本人学生と教育機関の職員の引き揚げと共に、当初は善後処理という目的として創設された満洲高等教育機関の同窓会は、その後、日本社会で親睦の目的で活動を継続してきた。一方、満洲高等教育機関

で学んだ日本以外のさまざまな出自の学生たちは、戦後、自らの国・地域に戻り、それぞれの社会においてさまざまな活動を展開し、そのなかで同窓と連絡を取り、さらに自らの社会ではエリートとして活躍していた。日本が他国と国交を樹立する際、戦後同窓会は、民間組織として国際的な技術交流活動や訪問活動などを通じて、日本と隣国の間で友情の架橋という役割を担った。特に日韓と日中の国交回復の前後には、同窓会で活躍していた同窓生たちが各領域で活躍する人物として大きな貢献を果してきた。

1972 年 9 月日中関係正常化ののち、日中間の交流は民間の分野で大勢となっていた。その中で、満洲日系高等教育研究機関の戦後同窓会も非常に重要な役割を果たした。日本の戦後同窓会にも、中国側の卒業生との交流の拡大に従って、満洲時代の記憶が再生されるようになる。

日本と中国間の外交関係の回復前、戦争期に満洲と日本での教育経験があった中国人卒業生は、中国政府から支援を受けた非政府の外交活動に役割を果たした。しかし、満洲の高等教育機関で教育を受けた経験を持つ多数の中国人卒業生は、中華人民共和国の建国後の一連の政治運動の中で、政治的衝撃を受け、社会的に冷遇される場合が非常に多かった。しかしながら日中国交正常化は、彼らに政治的および学術的分野に復帰する機会を提供した。これらの満洲日系教育機関からの卒業生は、留日経験を有する卒業生より数が多く、中国同窓の主流になっていた。彼らは、日中親睦の社会的雰囲気の拡大とともに、日本同窓会から刊行された会報・会誌に寄稿し、日系同窓会が開催した懇親会にも何度に参加し、日本人学生との連絡往来もかなり盛んとなった。以上のような内容は、日中国交回復後の約 10 年の間に、日本の同窓会から刊行された同時期資料に詳しく反映されていた。

しかし中国系卒業生たちは日系の同窓会に参加する一方で、自ら書いた回想録の中で反満抗日運動に触れている場合も多かった。もちろん、両者の間には時間と空間の変化がある。中国の卒業生が親善活動に積極的に参加する時期は、1990 年代以前、特に 1980 年代中間から後半の時期であった。また、吉林省長春市政協文史出版社が発行した『回億偽満建国大学』と『回億偽満新京工業大学』、長春工業大学側が編集した『長春工業大学校友記事』など

の回想文集の中には、満洲国の「民族協和」理念や在学生活の経験が反映され、または批判されていた。これらの内容には、学生の学習生活以外にも、学校で経験した民族的抑圧、参加した「読書会」などの地下学生組織の活動、その後の満洲国の日系高等教育機関で盛んであった「反満抗日」運動など、満洲国の高等教育に対する厳しい批判も含まれていた。しかし、これらの「反日的な」感情を吐露していた回想録の著者である中国同窓は、他方で、日本側が主催した懇親会に参加し、あるいは日系同窓会の会報・会誌で日本人同窓生と連絡を取り合う場合も多かった。

本研究は、歴史社会学の観点から、中国同窓生が、自らの満洲経験に対し、場所や時間によって明らかに異なる態度を分析することである。彼らを主体とする中国社会の「知日派」が、日中関係の改善に貢献したとすれば、彼らの行動が、彼らの記憶や歴史的理解に関係しているのか、あるいは相互にどのように影響し合っているのかという問題を分析することは、本研究の重要な考察部分をなす。

他方、日本の卒業生の回想では、満洲の記憶について叙述する時、他民族の同窓とともに生活した経験よりも、むしろ日系同窓や教授たちの思い出、さらに戦後の引揚についての内容が多く占めた。このような記憶は、中国側の内容とは大きな違いをもたらし、建国大学に対する非常に異なる認識と態度を生み出した。さらに、政治的に対立している日本人と中国人の間に立っていた他の民族集団（韓国、台湾、内モンゴル、白系ロシア人）の同窓生は、満洲で教育を受けた経験に対し、両者とも異なる態度を取っていた。本論文では、そのような異なる記憶が生れる理由についても重点的に検討を試みる。

本研究には、以上のような問題群を念頭に置きながら、異なる同窓生集団の回想文集を分析しようとする。異なる民族の同窓生の文集の中では、政治的色彩が如何に記述されたのか、またはどのような政治色彩が記述されたのか、あるいは同窓会は戦後にどのような活動を展開し、どのような社会的影響を持ったのか、こうした側面を分析する。さらに、歴史社会学理論を用いて、異なる同窓生集団の回想文集の差異、そして戦後の日中、日韓、日台、日蒙、日露関係の長い歴史のなかで、各集団の同窓たちが育ててきた友情の

歩みを考察したい。

その際、戦後同窓会という形により、民間外交でつながっていた日中関係の歴史は、同窓の交流の規模や密度において重要であり、とくに再検討に値する。民間外交を担った各国・地域の同窓たちが過去についていかなる集団的な記憶をもち、それがどのような特徴を有し、さらに状況の変化に応じていかに変遷したかという問題は、戦後日中関係や現在の歴史認識問題を考える上でも興味深い作業になると思われる。本研究は、旧満洲国日系高等教育機関の戦後同窓会の意識や記憶について、歴史社会学の「集合的記憶」の理論や「記憶の場」の理論を用いて考察することを目的としている。そして、それに基づいて、満洲日系高等教育機関の卒業生たちの同窓会における活動について詳細な考察と分析を行い、異なる国や地域の同窓生の「満洲記憶」の類似点と相違点を比較する。

本研究の対象は、旧満洲国日系高等教育機関の戦後同窓会（以下、戦後同窓会という）である。戦後同窓会は、1940 年代後半から 1950 年代に順次設立された（旅順工科大学同窓会：1946 年、建国大学同窓会：1953 年）。戦後同窓会の組織と活動には、近年学界で広く議論されている「歴史」と「記憶」の複雑な関係を示している。アルヴァックス（Maurice Halbwachs）の「集合的記憶」とノラ（Pierre Nora）の「記憶の場」の歴史社会学理論によると、「歴史」と「記憶」は常に対立する概念として理解されている。本研究では、同窓生の「満洲記憶」が生まれた場として戦後同窓会を位置付け、そこでの記憶のメカニズムを検討する。戦後同窓会は各同窓生集団から生まれた「満洲記憶」を記述する一方、その異なる集合的記憶が特定の条件下で変容することも示している。

本研究の問題意識は、そのような変容や差異が生じた背景と、その差異が同窓会活動に与える影響を調査・分析することである。こうした分析は、さらに、現在の東アジアでも重要な課題となっている歴史認識の問題を考える上でも大きな示唆を与えるであろう。

第二節　研究史概観

日中国交回復後、民間外交活動とともに満洲国における高等教育機関の同窓会による日本同窓の訪中活動が盛んになった。満洲国高等教育を受けた中国側の同窓生もその機会に同窓会の催しに参加したり、自ら満洲経験について書いたりした[1)]。時の経過とともに満洲経験者はその多くが歴史の舞台から撤退した。しかし彼らは戦後の平和的な国際環境の構築に貢献し、日本と隣国の関係を発展させ、その歴史の証人となった。彼らは満洲の歴史の叙述および戦後国家間の国交回復のために物質的・精神的なリソースを提供した。その際日本側の満洲教育経験者であった日系同窓生が戦後同窓会報や回想文集を編集した。代表的な回想録としては小林金三『白塔』（2002、新人物往来社）、百々和『道芝』（1983、三和書房）、志々田文明『武道の教育力 ― 満洲国・建国大学における武道教育』などがある。そうした回想録の中では昔の同窓や教員についての思い出、青春期の経歴、戦後シベリア抑留や引揚経験について詳細に述べられている。

これまで多くの他の民族の満洲教育経験者、とくに中国側の経験者は満洲国を台湾・朝鮮などと同じく日本の植民地と見なし、その教育自体を「奴隷化教育」、「漢奸教育」と批判しつつ、自らの抵抗や闘争を回想録で描いた。そのうちの代表的な著作としては中国人同窓生聂长林の『幻の学園・建国大学』、『抗日曲折行――建国大学を出てから』（1997）、台湾人同窓生李水清の『東北八年回顧録』（2007）などがある。こうした他の民族の同窓生の回顧録では植民地における侵略と闘争の観点が重視されている。それはナショナリズム的な視点からの見解を反映しており、日本の満洲建国精神である「五族協和」の虚構を批判しつつ、自分がそれに対しどのような態度をとったのかについて記録している。

1）　しかし、これまでのところ、満洲における日系教育機関の連絡組織ないし同窓会組織に関しては、必ずしも詳細には研究されていない。坂部晶子（『「満洲」経験の社会学――植民地記憶のかたち』）はかつて満洲における関連組織および同窓会組織について所属機関別に整理した。しかし坂部はそうした組織に入会した同窓生の満洲記憶について言及していない。

戦後同窓会の活動に関する現在までの研究は、おもに日本人研究者によっておこなわれている。中国と韓国の同窓生は個人的な回顧録を出版し、小さなグループを組んで日本を訪問し、同窓会の催しに参加した。すなわちその卒業生のうち、他の国では日本の同窓会に匹敵するような同窓生組織は成立しなかった。彼らは日本の同窓生が中国・台湾・韓国を訪問する際、比較的な大人数で歓迎会を催し、出席した。

以上を踏まえ、研究史概観では以下の四つの側面を考察する。第一に、満洲高等教育機関における人材養成に関する研究、第二に、一つの代表的なケースである満洲建国大学に関する研究、第三に、満洲における反満抗日運動に現れたイデオロギーに関する研究、第四に、同窓会と外交関係に関する研究である。

（1）　満洲高等教育機関における人材養成についての研究

第二次世界大戦後、まず日本で満洲国教育に関する研究が現れた。日本では、満洲国教育史研究会により監修された『「満洲国」教育資料集成 III 期「満洲・満洲国」教育資料集成』（1993、エムティ出版）では 1904 年から 1945 年までの関東州、満鉄および満洲国の教育法規、学校教育内容、社会教育などの豊富な史料を収録し、満洲・満洲国教育の多様な側面を示している。近年では九州大学の祝利が満洲国の日本語教育と教員養成について博士論文を発表した[2)]。祝は満洲における日本語教育の歴史的な観点から研究し、日本語教育は実に満洲国建国の精神および満洲国教育の核心を形成したと述べた。祝によれば満洲国政府が社会教育に大いに力を注ぎ、一面では、知識普及のために、「社会の中枢」と見なされた官吏、教員に対する教育を実施する同時に、一般民衆に識字教育、実業教育などを行い、社会全体の教育水準の向上に努めた。もう一面では、精神教育のために、「宣撫」、「宣伝」などの方策で民衆に満洲国の建国精神を鼓吹したと考察した。

しかしこのような多様な学校教育と社会教育を通して満洲国に役立つとさ

2）　祝利『「満洲国」における「民族協和」下の人材養成と日本語教育』九州大学博士論文（比較社会文化）

れた人材はいかに養成され、また、その人材養成にはいかなる特徴があったのであろうか。こうした問題は、卒業生たちの「記憶」の前提であり、その解明も本論文の重要な課題である。満洲国の最高教育機関である建国大学は「アジア主義」と日本植民地支配の精神を反映したショーケースである一方、学生運動と反日団体の地下工作の温床もなった。建国大学は「アジア主義」思想と「五族協和」の政策方針に従って、日本、朝鮮、（うち）モンゴル、中国、白系ロシア出身の学生たちが一緒に生活する特別な学校であった。しかし学生たちの理想は出身民族によって異なり、同床異夢であったといえよう 。「満洲国」は、砂上の楼閣のように不安定な政権であり、その内部では統一性が欠如し、想像を超えた混沌と冲突が支配している。そのため、建国大学の一部の中国人学生は、混沌と冲突の中で日本の植民地支配に反対し、反満抗日運動を戦った。その中に生まれた反植民地意識と左翼運動も戦後彼らの生活に多大な影響を与えた。

竹中憲一の著作『「満洲」における教育の基礎的研究』（2000）では満洲における朝鮮人教育について紹介している。第一章では、朝鮮人の早期移住の沿革から始め、朝鮮人教育の特殊性について紹介した。例えば、移住の初期・前期・中期の移住原因、移住者出身地の分布・職業・経済状況および移住者人数の推移である。第二章では、異なる時期における中国での朝鮮人教育の流れについて述べている。具体的には、清朝末期から中華民国初期までの状況、教育権回収運動とともに朝鮮人教育の中で発生した変化などについて検討している。第三章では日本における朝鮮人教育を紹介している。間島における教育活動から始め、間島の政治的位置、統監府臨時間島派出所の設置、間島普通学校および間島における日本人教育など内容も含まれる。第四章と第五章では、満鉄付属地および臨界地区における朝鮮人教育について紹介し、さらに関東州で展開された朝鮮人教育についても触れている。「日韓学堂」・「日朝教学制度」などにも重点を置く。第四章第 9 節の部分では「万宝山事件」および「満洲事変」後の朝鮮人教育の状況について分析している。[3)]

3） 竹中憲一、『「満洲」における教育の基礎的研究、第 5 巻、朝鮮人教育機関』、柏書房、2000；178 頁。

この研究で竹中は、植民地当局と植民地朝鮮人の間に存在していた利益衝突と矛盾を明らかにした。時間の推移に従って、満洲地区における朝鮮人学校数、志望者数、入学許可者数および入学率も変化した。満鉄が行った朝鮮人教育の「拡大方針」も示されたが、満洲国の成立とともに推進された「共学制度」政策の実施、および急速に増加した朝鮮人生徒の進学希望が満鉄にとって圧力となった事実についても触れている。高等教育に対する期待は、朝鮮人に一連の運動を行わせられたが、朝鮮人の反日意識もその中から生み出されたという。竹中の研究によれば、植民地の行政官も上に述べた反日運動を恐れ、民族意識を抑圧するために、普通の高等教育を発展させず、かわりに実業教育の側面に重点を置くべくことと判断したという。[4)]

続けて竹中は、『「満洲」における教育の基礎的研究』（2000）において、満洲における教育活動を年表の形で整理している。考察の対象とした時期は1897年から1933年である。教育年表の作成にあたっては、関東局や南満洲鉄道株式会社の関連機関の情報を利用している。例えば、関東長官官房文書課、関東都督府陸軍部、満鉄地方部学務課、満鉄庶務部調査課、満鉄総裁室地方部残務整理委員会、満鉄初等教育研究会などである。さらに満史会、教育史編纂会等の機関も含まれている。

そのほかに、この研究では多くの満洲教育関係資料を載せている。例えば、初等学校、実業学校、女子学校、師範学校の教育資料、高等教育機関の教育資料などである。さらに一部教育機関の戦後同窓会に関する資料も載せている。

(2)　建国大学に関する研究

宮沢恵理子は建国大学の創設と教育活動の中に現れた「民族協和」について研究した。宮沢は多くの史料に基づいて、建国大学の性質と創設者としての「協和会」の背景を分析しながら、学科の設立を通じて建国大学で唱えられた「民族協和」の本質を探った。「民族協和」について宮沢は、建国大学における「塾制度」と「農事訓練」等の管理制度と訓練制度に着目しつつ、

4）　註3に同じ。

学生の生活における「民族協和」の実態を分析した。その論文は戦後における日本民族以外の学生の動きにも触れている。宮沢は研究中に何度も国際善隣協会（後述）を訪ね、同窓生にインタビューを行った。宮沢の研究は、以前の満洲研究と比較すると、豊富な歴史資料の利用、数多くの同窓生たちとの直接交流などに特徴がある。

宮沢はその研究において、1、建国大学の思想の母体、2、建国大学の教育研究活動の実態、3、「民族協和」方針に従った建国大学学生の生活、4、卒業生の戦後の運命と建国大学の遺産、という 4 点について検討している。

この研究の基礎資料として建国大学の関連資料と関係者の証言を用いた。宮沢は「民族協和」の方針の由来について以下のように述べている。満洲建国の直接参加者である小山貞知（満洲評論社社長）等は「民族協和」精神の創設者の役割も担った。戦後の学界では、「民族協和」は政治宣伝的なスローガンであるという認識が主流であった。しかし、小山たちはそのような批判的な歴史観を受け入れなかった。「民族協和」を理想とする小山たちは、戦後においても、満洲国はあくまでも客観的な要因のために失敗した「見果てぬ夢」であると信じていた。「民族協和」精神の創設者たちは、被支配民族に対して差別的な扱いを行わなかったが、他の民族は「皇道」によりイデオロギー上には日本と一致する必要があると主張した。

そのため、宮沢によれば、いわゆる「民族協和」は、実際には、支配者である日本人の「満洲国」建国理念ではあったが、理論上は他の国々との「共存と共栄」をも達成することができる筈であった。しかしながら、このような「建国精神」イデオロギーの伝播は必然的に「皇道宣布」となり、日本の支配と日本文化を強制するものになった。こうして建国大学は、形式的には満洲国の最高教育研究機関であったが、本質的には「満洲に設立された日本の大学」となったと断言した。

「民族協和」の実験場と化した建国大学では、農業訓練と塾制度という特別な制度を利用して、閉鎖的な空間を作って、「民族協和」という満洲国の建国精神とイデオロギーの育成が企てられた。建国大学の設立者たちは、他の民族グループの学生の間での相互扶助と連帯感を強化し、学生に「民族協

和」という満洲国の国家理念を教え込んだ。しかしながら実際には中国人学生の民族主義運動が盛んとなり、「一徳一心」を強調する「民族協和」は達成されなかったという。一方で満洲国の国家理想である「民族協和」イデオロギーに縛られた日系学生たちは、他の民族と生活することにより価値観の変更を余儀なくされる。これを根拠に宮沢は、満洲国の「建国精神」イデオロギーと化した「民族協和」が実現不可能な夢想などではなく、従って「見果てぬ夢」でもあり得なかったと主張した。

しかし、この研究にもいくつの限界があると考えられる。まず、宮沢は建国大学の創立期の各制度、例えば生徒の面接や試験制度、学校運営を管理する規則などに多く言及しているが、第 3 章でその体系を論じる時、塾制度に関連しては公刊史料に重点が置かれており、実際の体験者である建国大学の学生の直接の回想やインタビューは比較的に不足している。中国人卒業生や他の民族の卒業生に関する史料もさらに稀である。しかしながら、戦後すでに 40 年を経過し、中国、日本、韓国の外交関係が正常化され、同窓生への密接な連絡が可能となっている。1980−1990 年代には、中国人と韓国人の同窓生にインタビューすることはそれほど困難であると考えできない。また、宮沢は建国大学同窓会を調査する過程で、長年にわたって関係者として同窓会懇親会に参加してきた。宮沢がさらに韓国人、中国人の同窓生と多く連絡を取り、訪ねていれば、研究は一層広がった可能性がある。しかも、特に中国人学生を巻き込む「民族主義運動」の章で、彼女の説明と分析が不足していることを否定できない。中国人学生の「民族主義運動」（「反満抗日運動」としても知られている）は、作田荘一学長の辞任と直接につながり、そして実際には「民族協和」イデオロギーの破産を意味した。この運動は国家的な矛盾をはっきりと表現するものであったから、「民族協和」の研究に関する論文では、それを特に書き込む価値がある。宮沢はこれに気づいていたが、さまざまな理由で、「反満抗日運動」に参加した中国側の卒業生とは連絡を取らず、日本の視点からのみ「民族主義運動」として分析した。

1965 年の日韓国交、1972 年の日中国交正常化、さらに 1992 年の中韓国交正常化以降、民間交流も盛んになった。その時宮沢は研究者として日本人同

窓生と密接に交流して多くの調査を行った。しかも日本人以外の同窓生の資料が十分ではないため、「民族協和」が失敗した原因の分析は一面的な見方となっている。しかも彼女は、日本の卒業生のイデオロギーの分析に焦点を合わせたことにより、中国系の歴史家が熟知している「反満抗日運動」を「民族主義運動」と表現している。すなわち彼女の観点からいわゆる革命的な性格は、建国大学の学生運動に現れなかった。日本人学生の理解では、「反満抗日」運動は「民族主義運動」に過ぎなかったからである。こうした認識の差異は、中国人同窓生のもつ「反満抗日運動」の記憶と戦後日系同窓生の「見果てぬ夢」の記憶、さらにそれ以外の出自の同窓生（モンゴル人、韓国人、白系ロシア人、台湾人）のもつ満洲記憶の差異を「集合的記憶」の観点から研究する時の手掛りとなる。

『五色の虹』の筆者である三浦英之は宮沢恵理子にインタビューを行った。その時（2012 年）のインタビューによれば、宮沢は建国大学について「国際的な文化交流の好例である」と積極的に評価した。しかしこれは宮沢の元々の結論と異なっている。宮沢が論文を発表したのは 1995 年であり、三浦が宮沢にインタビューしたのは 2012 年である。その 10 数年の間に満洲建国大学「民族協和」研究者としての宮沢の歴史観が大きく変化したことも、「集合的記憶」を研究する筆者に興味深い実例を提供している。

新聞記者であった三浦英之は、建国大学の「最後の同窓会」（2011 年）の後、4 年間続けて建国大学の 11 人の同窓生にインタビューを行い、2015 年に『五色の虹』を出版した。この本の主な内容はインタビューであるが、作者の主観的見方を表現するため、一般的な歴史研究とは異なり、ある程度文学的なスタイルを取っている。三浦は日本、中国、台湾、韓国、ロシア、さらにモンゴルの卒業生にインタビューを行った。三浦によれば、、彼は満洲建国大学を卒業した五つの民族の同窓生を尋ねて、できる限り高齢である卒業生にインタビューした。三浦の本ではその卒業生の戦後経験を含み、この異なる民族グループ間の葛藤、および戦後の経験を記録しており、興味深い作業だと考えられる。彼によれば、建国大学の卒業生は、選ばれた才能ある人材として、時代と環境の変化にも関わらず、自分の属する社会でエリート

として活躍した。しかし、戦後の国際情勢の変化と各国の政治構造の変化により、政治変動の影響を受けた卒業生もいた。もちろん三浦の研究は、いわばノンフィクション作品であり、それを普遍的な歴史研究と位置付けるのは適切でない。インタビューされた卒業生は全員高齢者であり、文章の形式も歴史家の基準と異なっている。特に第一次史料などの文献資料は必ずしも多いとは言えない。しかし、卒業生の伝記的な記録としてみれば、同じ学校で勉強した学生が学校の廃校後に経験したさまざまな人生について興味深い記録を提供していると言える。三浦の著作では建国大学の卒業生の人間性が示される一方、若い日本の知識人が「五族協和」をどのように理解したのかが示される。

(3)　満洲における反満抗日運動とイデオロギー

田中恒次郎『満洲における反満抗日運動の研究』（1997）は、満洲国全体を対象としつつ、共産党が都市から農村への拠点を移しながら反満抗日運動を発展させた実態を分析した。田中は多くの中国語研究論文を引用し、それぞれの組織ごとの反満抗日運動の変化および共産党の発展にも言及した。それを踏まえて田中は、反満抗日運動が 1941 年 12 月までにピークに達したが、とくに農村の場合では共産党の役割が比較的に重要だと主張した。

中山紀子の論文「『満洲国』の建国大学における中国人学生の反満抗日運動」（2015）も注目に値する。中山は建国大学の当事者、反満抗日運動を経験した中国人学生に関心を向け、反満抗日運動の状況とその原因の分析を行った。中山によると建国大学における「反満抗日」運動の実態は民族主義運動であり、共産党より国民党からの影響を多く受けたという（そうした認識は宮沢恵理子の研究とも共通している）。

一方中国側の回想文集である長春政協文史資料編集室編『回憶偽満建国大学』（1996）によれば、一部中国系学生は自ら共産党の影響を受けて反満抗日運動の道を歩き始めたと述べている。彼らは建国大学で「読書会」を通じでマルクス主義を研究し中国革命についての意識を育てたという。しかし、一部の学生の回想文によれば、建国大学の「反満抗日」運動の組織者である学生たちは、国民党系地下工作者と連絡があったと記録している。 さらに

反満抗日運動の代表人物である馬鎮山の回想録によれば、建国大学の教授陣のうち作田荘一副総長は統制経済学の専門家で、全体主義的な思想を唱えていたが、山内一男教授はかなり進歩的な学者であったという。馬は中国系学生の「読書会」で読んだ毛沢東の『新民主主義論』も山内から譲渡されたと記録している。こうしたことから、建国大学における反満抗日運動の発生条件およびイデオロギーは、満洲農村における反満抗日運動とは大きく異なっていたと考えられる。ただし日中国交正常化の 20 年後に中国で出版されたこの回想文集では、多くの中国人学生は、当時の反満抗日運動は国民党と関係を持たず、その性格は「民族主義運動」というよりも、毛沢東流の「新民主主義運動」であったと見なした。

竹中憲一の研究『大連、アカシアの学窓――証言、植民地教育に抗して』（2003）（以下『証言』）の中で竹中は、大連の教育に参加した多くの経験豊富な人々にインタビューを行った。竹中は、関東州の中学校、満洲国時代の学校、私立学校、さらには高等教育機関で教育を受けた人々、日本への留学生（主に早稲田大学で留学を経験した人々）、さらに海外（ソウル、台湾）出身で大連での教育を受けた人々の証言を集めている。この『証言』では、植民地教育を受けた人々の個人的な経験に深く入り込み、被支配民族出身学生の植民地教育に関する経験と感情を紹介した。『証言』は、前述の中国側の回想文集『回憶偽満建国大学』（1996）と同じく、学生の民族意識と反抗精神を表現していた。多くの学生の証言には、「勤労奉仕」、「東方遥拝」、「解放区」、「中国人としての民族意識」、「東北流亡学生会」（戦後中国の東北地区における亡命学生組織）や、「反満抗日運動」などがキーワードとして頻繁に使われた。インタビューの対象者の思考は、『回憶偽満建国大学』（1996）への寄稿者、すなわち建国大学の中国籍卒業生の思考と多くの類似点があった。『証言』は、さらに、日本、朝鮮、台湾から満洲に留学した経験のある人々にもインタビューを行っている。彼らの教育経験は前出の満洲出自の学生とは異なって、植民地教育に対して反抗的なイデオロギーをも示しているので、参考文献に加えるべきであると考える。

（4）　同窓会と外交関係

浜口裕子『満洲国留日学生の日中関係史――満洲事変・日中戦争から戦後民間外交へ』（2015）

この本は、主にオーラルヒストリーと文献研究を通じて、「抗日組」・「留日組」の留学生が太平洋戦争前後どのように生活していたか、戦後どのような仕事をしていたか、さらにその後中国文化大革命の時に日中関係と日中国交正常化のためどのような貢献したかについて述べている。満洲国の「日満一徳一心」の支配方針に従って、数多い満洲学生が日本に留学してきた。しかし、厳しい管理制度及び親日教育を嫌がる彼らは「反満抗日」的な感情を抱いた。その感情的要因は彼らがその後中国共産党に合流することの心理的前提となった。

浜口は満洲から日本へ留学した学生を「抗日組」と「留日組」の二つのグループに分けた。浜口は二つの組の代表人物である孫平化と韓慶愈の人生について研究することを通じて、この特別な歴史的期間における政府外交と民間交流の関係を巨視的に検討した。要約すると、「抗日組」の孫平化らは、日本の抑圧的留学生管理制度に反抗し、共産党の地下組織に参加し、中華人民共和国の創設後の社会主義建設期間中の外交の基幹となった。「留日組」の場合、まず韓ら普通の留学生は、中国人としてのアイデンティティを維持し、中国に戻る前に中国の地方自治体に連絡し、関連する政府部門や研究機関に勤務するように割り当てられた。他方、丁非[5]は、満洲国支配者の家族として、反満抗日運動に参加し、情報工作を担った。周恩来は日中外交関係正常化の中国側リーダーであるが、廖承志はこの過程の事実的な中心人物人物であった。孫と韓は、「抗日組」と「留日組」の代表人物として廖承志の個人的な信頼を得た。しかし「抗日組」と比べると、「留日組」である在日華僑は、情報が不足していたため、中国国内の政治的変化に理解が足りない場合もあった。浜口は日中民間外交の日本側プレイヤーは主に日本の実業団体であり、さらには旧軍人団体もあったと指摘した。彼らは毛沢東か

5）　満洲国国務総理張景恵の息子。当初張紹雄という名前を使った彼は、その後丁非という名前で地下活動を行った。

ら信頼と支持を得ていたから、彼らが担う戦後の日中関係も順調に発展してきた。中国共産党も戦後日本の複雑な政治関係を利用して、満州国の留日学生の役割を十分に利用し、1972 年の日中国交正常化のために、経済、技術、情報の面で慎重な準備を進めた。これは、中国共産党政府が台湾に代わって国際舞台に登場していくため重要な戦略であった。中国政府の努力は成果を上げ、戦後の民間外交も一層発展した。浜口の研究では、同窓会の役割ではなく、中国政府に参加した留日学生および戦後日本に滞在した留日学生が果たした役割に重点を置いた。ただし、彼らと交流した日本側の相手は主に実業系友好団体と旧軍人団体であるとされ、満洲日系学校の卒業生と同窓会についてはほとんど言及されていない。

佐藤量『戦後日中関係と同窓会』（2016）

佐藤量は黄順姫の社会科学的な「同窓会ネットワーク」理論を使って、異なる集団の満洲記憶の構築を説明しようとした。佐藤は詳細な歴史資料を検討し、大連で現地調査を行った。歴史の各段階を横軸とした第 1 章では、1930 年代から 1940 年代の間における関東州内の中国人向けの学校と日本人向けの学校に着目した。第 2 章では、戦後日本人の引き揚げと中国人の帰国と待遇について述べ、第 3 章では旅順工科大学に重点を置いて分析し、日中国交正常化および 1950−1960 年代日中民間友好交流の流れについて整理した。佐藤は日中国交回復の 1972 年後、大連を中心とする同窓会の活動および同窓生の満洲経験と記憶を紹介した。

佐藤の研究は本論文の筆者に多くの情報を与えてくれるが、なお検討すべき部分と議論すべき部分を残している。まず、佐藤の研究は「戦後の日中関係と同窓会」と題されているにも関わらず、研究対象は関東州に限られる。関東州には南満鉄道株式会社関係の同窓会を含む多くの同窓会があり、その同窓会も戦後さまざまな活動を進めた。そのうち佐藤が研究したのは高等教育機関であった旅順工科大学の同窓会のみである。さらに佐藤は旅順工科大学同窓会会長であった相田秀夫の訪中活動と大連日中友好協会の設立についてそれぞれ詳しく検討している。

植民地時代の経験と記憶を述べる第 5 章では、当時の同窓会会報や会誌な

ど文献史料ではなく、主にインタビューと私信などの資料を利用している。そのため歴史研究としての説得力がやや弱いように思われる。同窓生の記憶に基づき昔の大連の地図を描いているが、そのことはもちろん彼らが叙述主体として記憶を再構成する過程を示している。ただし佐藤が提供したいくつの例はほとんど個人の経験であり、集団としての記憶を研究する場合はやや制約がある。中国人同窓生についての叙述にもやや不足する点がある。佐藤は満洲日系大学の卒業生である一人の中国人同窓生が戦後中国の政治運動の影響を受けて中国で社会的に冷遇されたと述べているが、その他の中国系同窓生については語っていない。さらに、佐藤が行った同窓生インタビューと回想録の中で、調査対象者は中国の政治に関してあまり言及しなかったと明確に述べているにもかかわらず、その理由についての立ち入った分析をしていない。

第三節　研究課題と方法

戦後、満洲における高等教育機関は廃止されたが、同窓生の社会的関係は保たれていた。日本戦後同窓会は、活動を行うためにさまざまな政府機関や非政府機関にしばしば依存した。戦後、日本側の同窓会は、日本で長期的な活動を組織し、海外の多様な民族の同窓生とも連絡を取り合った。その際、海外への訪問活動や海外同窓との交歓活動などは定期的に行われていた。

本論文は、文献研究の方法を主に用いて、満洲日系高等教育機関の戦後日本同窓会の出版物を収集・整理している。これに基づいて、中国、韓国、台湾の同窓が刊行した回想文集と関連する歴史資料を比較し、「集合的記憶」、「同窓会の社会学」および他の社会学的理論を参照し、歴史社会学の観点から各国の同窓生の戦後活動を要約する。満洲日系高等教育機関の同窓会の満洲に対する記憶を分析し、満洲で日系高等教育を受けた経験者の角度から東アジアの国々における異なる歴史記述に対して分析を試みる。

本論文では、さまざまな出自の同窓生により書かれた回想文を分析し、個々の集団の「満洲記憶」を包括的に分析することを目指している。集団的記憶が存在するかどうか、またはそれがどのように異なる政治色を示すか、

そして戦後同窓会が社会にどのような影響を与えたのかを分析する。アスマン（Jan Assmann）やアスマン（Aleida Assmann）の「想起の文化」およびその他の歴史社会学、歴史哲学理論を検討した上で、社会学者アルヴァックス（Maurice Halbwachs）の「集合的記憶」理論とノラ（Pierre Nora）の「記憶の場」の理論に基づいて、戦後同窓会の場でさまざまな出自の同窓生の回想文に記録された「満洲記憶」の違い、および半世紀以上にわたる社会的文脈の変化とそこにおける日中、日韓、日台の同窓生の間の絆と友情、そこから生まれたネットワークが国際的友好と交流に与える影響を考察する。

すでに多くの同窓生は亡くなっているので、本稿は文献研究を中心とするが、オーラルヒストリーの研究方法（二人の建国大学同窓生に対するインタビュー）も部分的に用いる。建国大学をはじめとする満洲・満洲国における高等教育機関に関する第一次史料および各同窓会の会誌について考察を試みる。同窓生の経験について研究を進める際、一部の卒業生の日記、回想録、会報などの関連史料も参照して研究する。

第四節　各章の内容および分析視角

この論文は三部に分かれる。第一部は「満洲国の高等教育機関とその同窓会――歴史学的概観」と題し、二つの章に分かれる。第一章では満洲の高等教育政策を紹介し、満洲教育の歴史を「満鉄時代」と「満洲国時代」の二部に分け、高等教育機関の発展について概説する。 第二章では、収集された同時代文献、刊行史料、同窓会史料、経験者の回想文集を要約することにより、さまざまな教育機関の概要と満洲時代の教育機関の機能や学生・教職員の出自も含めて考察し、さまざまな教育機関について、その戦後同窓会の特徴を分析する。 戦後同窓会を考察する際のポイントは、同窓会の歩み、同窓会活動の特徴、同窓生のキャリアとネットワーク、または同窓会の海外での活動状況である。第一部では初めに同窓会の語りと記憶という概念を導入する。

第二部では、満洲国の国策大学である建国大学をケースとして、考察と分析を行う。建国大学では、「五族協和」という満洲国国策を体現し、学生の

出自も多様であった。そのため、建国大学の同窓会はもっとも代表的な例として説明することができる。さらに建国大学は満洲国が設立されたあとに建学されたため、満洲における他の大学と比べ歴史は短く、同窓生の年齢も満洲の他の高等教育機関の同窓生と比べて比較的若いからである。現存する資料の中では、建国大学に関するものは質量ともにもっとも豊富で多様であり、建国大学の同窓会も 2010 年まで定期的・継続的な活動と会報の発行を行っていた。このため、調査対象としては代表性を備えていると考えられる。さらに、建国大学の同窓生のほぼ半数は日本以外の出自の同窓生であるため、本研究おける同窓会に関する「集合的記憶」の理論的考察（第三部）に、より多くの情報を提供することができる。第二部の第一章では建国大学の概況、第二章では建国大学のイデオロギー、第三章では建国大学における「反満抗日運動」、第四章では同窓会が刊行した私家版史料に記録された建国大学の崩壊を紹介する。第五章では、建国大学の戦後同窓会活動の特徴と戦後同窓会による海外同窓との国際交流の状況を考察する。

第三部は本研究の理論的考察部分である。第三部では、アルヴァックスの「集合的記憶」理論とノラの「記憶の場」という歴史社会学理論を用いて同窓会と同窓生の「満洲記憶」をめぐる相互作用について説明し、植民地教育経験者の異なる歴史認識を分析し、記憶の連続性と多様性を明らかにする。本稿では、「記憶」と「歴史」の対立・統一関係を分析する視座から、同窓会の語りと記憶の再構成を考察する。第三部の第一章では、同窓会の「語りと記憶の再構成」の視座から「集合的記憶」および「記憶の場」の理論を紹介し、第二章では、同窓会報における満洲記憶を紹介する。その際、所属組織および時系列に沿って会報の内容を考察する。第三章では戦後日韓、日中国交回復と同窓会の活動を考察する。第四章は、出自ごとに分かれる同窓生の語りと記憶を検討する。日本人同窓生の場合、かつての友人である日本人同窓をめぐる語りと記憶、引き揚げの記憶、思い出、亡き人についての弔意表明のあり方などである。一方中国人同窓生の場合、反満抗日運動と中国革命への参加、または新中国建設への積極的参加などが集団的な満洲記憶を形成したことを示す。第五章では同窓会とネットワークを紹介している。はじ

めに同窓生のキャリアとネットワークを紹介し、さらに国際関係などの影響を受けたネットワークについても考察している。

第五節　史料状況

(1) 日本語史料（未刊行史料および同窓会関係私家版史料）

a. 国際善隣協会所蔵史料

国際善隣協会とはもともと「満洲交友会」という財団法人であった。1947 年 7 月に満洲交友会を引き継いだ社団法人「国際善隣倶楽部」が、中国やアジア諸国との友好関係を築くことを目的として外務省の管轄下に設立され（1972 年に「国際善隣協会」と改称）、民間の友好交流において現在でも重要な役割を果たしている。建国大学の日本側卒業生のなかには善隣協会の役員として勤務した例がいくつか見られる（本稿で使用した国際善隣協会所蔵史料は本論文末尾の「文献目録」に挙げてある）。

b. 玉川大学教育博物館資料室所蔵史料 [6)]

玉川大学教育博物館は、小学校・中学校を含む旧満洲教育機関関係資料を中心として、1980 年代から 1990 年代に多くの資料を収集し、保存している [7)]。さらに、同窓生が寄付した資料も数多く収集している。その中には、大同学院、建国大学、旅順工科大学、新京工業大学、ハルビン工業大学、満洲医科大学、佳木斯医科大学、旅順師範学院女子部、奉天工業大学、中央師道学院、南満工業学校、蒙疆学校、ハルビン学院等の資料も含まれている。そのほかの私家版史料、例えば湯治万蔵編『建国大学年表』（1981）、満洲国立大学ハルビン学院同窓会編『ハルビン学院史 1920−1945』（1987）などの関係史料も

6）　玉川大学教育博物館（元玉川大学小原国芳記念教育博物館）は、1929 年に玉川学園が設立された当初、教科書を保存する機関として建てられた。1969 年、玉川学園創立 40 周年を記念して、大学図書館に「教育博物資料室」を設置し、所蔵資料の充実を図るため、1987 年に「玉川学園教育博物館」を開設した。1996 年、教育博物館（設立 10 周年）は玉川大学付属機関に再編された。

7）　本論文の資料収集の段階では、玉川大学教育博物館資料室が所蔵している私家版資料を大量に利用した。その過程では当時の玉川大学教育博物館館長大西珠枝先生、および田中弥生子先生のご高配により多くの資料を閲覧することができた。特に教育博物館資料室嘱託白柳弘幸先生には大変お世話になった。ここに謝意を表したい。

所蔵されている。

本研究で使用した玉川大学教育博物館の所蔵史料は以下の通りである。大同学院関係史料。大同学院は満洲国では建国大学と同じく高級官僚の養成所と評価された。一部の建国大学の卒業生は卒業してから大同学院に進学し、他の卒業生は満洲国の公務員になってから研修目的で大同学院に入学できた。大同学院の関連史料は、大同学院の学院史編纂委員会が編集した内容によって分類される。まず大同学院創設の周年誌という形で編集されたものに以下の史料がある。『友情の架橋・海外同窓の記録――満洲国大同学院創設五十五年記念』（1986）、『渺茫としても果てもなし――満洲国大同学院創設五十年』（1987）、『久遠――創立六十年記念』（1999）、『物語 大同学院・民族協和の夢にかけた男たち――創立七十周年記念』（2002）。これらの記念誌は、大同学院の歴史をまとめたものであり、広い時間と空間の範囲から同窓会活動と同窓間の友情を記録している。記念誌には同窓生の連絡先を詳細に公開しているが、これは過去を記録するだけでなく、同窓会刊行物が同窓生のネットワークを維持する機能を担っていることを示している。

以上のほかに、卒業年度ごとの私家版史料も収集されている。いわゆる『碧空緑野三千里』（1972）、『大同学院 6 期生回想録』（1972）『大いなる哉、満洲』（1966）、『旺なる吾等』（1983）である。同窓会総会により編纂された先述の周年誌と比べ、それらは一部の大同学院の卒業生の小範囲の「出来事」、あるいはこれらに対する「語り」と回想などが反映されている。しかし、このような小範囲の同窓会刊行物にも、総会との積極的な交流活動が反映される。それらは大同学院の戦後同窓会の高度的な組織性と活躍程度を示している。

建国大学関連史料。大同学院と比較すると、所蔵された建国大学の関連史料の量は多い。まず、建国大学同窓会により刊行された史料は次のようになる。『建国大学同窓会会報』No.1−56（1954−1956）、『建国大学史資料』創刊号―第 5 号（1966−1971）、『歓喜嶺 1980 年』（1980）、『歓喜嶺 1980 年』（1980）、『写真集 建国大学』建国大学同窓会（1986）、『歓喜嶺遥か』上下（1991）、『同学連歓 1』（1993 年）、『同学連歓 2』（1997）。これらの史料は、

建国大学同窓会の戦後の活動を反映したものであり、『建国大学史資料』全5期の編纂からは、建国大学の同窓生が彼らに専属する集合的記憶および経験を解釈または支配しようとする意識を読み取ることができる。 また、各期ごとに同期会組織が設置され、会誌と会報などの史料もそれらの組織により刊行される場合もあった。すなわち、建国大学 1 期生会『会報』No.1（1958. 7）、『歓喜嶺 建国大学一期生文集』（1989）; 建国大学 2 期会『二期』（1989）、建国大学 3 期会『建国大学三期会会報』1−42 号（1948−1995）; 建国大学 4 期会『楊柳 建国大学 4 期会報』1−27 号（1948−1995 年）; 建国大学 6 期会『曙きざす』（1981、1986）、建国大学 9 期会 :『建国大学 9 期生』（1995 年）。

そのほか、一部の同窓生または教職員の回想録も所蔵されている。作田荘一『道を求めて』（自伝）、『道の言葉』（1963）、藤井歓一（湯治万蔵編）『ひたぶるに、真実に〈藤井歓一建国大学日記抄、その他〉』（1992）、中国同窓である聂长林の回想録も日本語に翻訳されて、同窓会によって出版された。『幻の学園・建国大学抗日曲折行――建国大学を出てから』（2000）など。

旅順工科大学関連史料。旅順工科大学同窓会から刊行された私家版史料は次のようになる。同窓会報『旅順』、51−136 号（1966−2010）、『旅順工科大学開学 90 周年記念 平和の鐘』（2000）、『旅順の日』（1973）である。旅順工科大学の同窓生は戦後の日本の産業技術分野で活躍したため、その一部の同窓生が「興亜技術同志会」という同窓会に参加し、その興亜技術同志会から刊行した同窓会報『興亜』（1931−1943; No.24−49 1955−1965 年）も玉川大学教育博物館に所蔵されている。『興亜』の中では、日中国交正常化前の日中技術交流活動に関する内容も含まれているが、中国と日本の外交関係が正式に回復される前、技術レベルでの同窓生間の友好的な非政府交流の貴重な証拠となっている。『掉尾を飾る ― 最後の旅順工科大学予科生の記録』（1990）も所蔵されている。

新京工業大学関連史料。玉川大学教育博物館に収集された新京工業大学同窓会の私家版史料は比較的に詳細である。とりわけ『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌 北辰高く――青春の新京時代と追想の日々』

（1998. 12）のなかでは、同窓会組織『蘭桜会』の成立事情が詳しく記録されている。それ以外では、蘭桜会福岡支部から刊行された『支部便り』（No.3）に同窓会付属機構の活動状況が反映されている。旅順工科大学と同じく、異なる専攻の同窓生が学科別の同窓会を組織した。たとえば「化人会」（新京工業大学応用化学科同窓会）、「机〔機〕友会」（同大学机械学科同窓会）、そして「採鉱学科同窓会」（同大学採鉱学科同窓会）である。それらの組織からは定期的に会誌と会報が刊行されていた[8)]。また、新京工業大学の卒業生である鈴木作良は、彼の詩句や過去の回想で構成された文集『桜』（1983 年）を出版した。その本には、在学中に撮影した多くの写真が収集されているほか、鈴木の個人的記憶も反映されている。すなわち従軍した経験や戦後引き揚げについての思い出なども含まれている。日本側の『新京工科大学関連史料』は、中国側で発行された『長春工業大学校友記事』と対照することができ、同時期の歴史経験に関する記憶を比較し、出自が異なる同窓生の異なる記憶を理解することができる。

ハルビン工業大学関連史料。ハルビン工業大学の状況は新京工業大学と似ているが、しかし玉川大学教育博物館に所蔵されている同窓会資料は多くない。収集した主な内容は次のようになる。『ハルビン工業大学写真集』（1985）、『南崗』No.1-17（1995−2006）、『ハルビン工業大学採鉱・冶金同窓会会報』、『ハルビン工大採冶会誌』No.1-4（1991−1995）、電気学科同窓会編『会報』No.4-11（1987−1994）など。こうした史料には、在学中の同窓生の姿が記録され、さらにハルビンの街並みの風景も含まれており、当時の日本支配下のハルビンの様子を伺うことができる。

本研究は、それ以外にも、満洲医科大学など医科系高等教育機関の同窓会関連資料を収集した。玉川大学教育博物館資料室に所蔵されている満洲医科大学に関係する史料の状況は次のようになる。『満洲医科大学一覧』（1934）、

8）　新京工業大学応用化学科化人会　『化人』　復刊号 —No.12 1977−1997 年；新京工業大学応用化学科化人会　『化人会報』　No.1-55 1984-2003 年；新京工業大学応用化学科化人会　『母校創立 60 周年校友聯誼会参加訪中団感想文集』　；『機友会　会員通信抄』No.1-16 1991−1999 年；採鉱三期会　会報『杏花』No.1-10 1994-2004 年。

同窓会機構である輔仁会編『輔仁』No.55-64（1977−1985）、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984）、『満洲医科大学 40 周年記念誌』（1952）、『満洲医科大学開学 70 周年祝典』（1980）、『鴉群』No.1-3（1973−1975）、No.55−59（1995−1998）である。各時期の会報・会誌を見れば、終戦直後の輔仁会の一連の活動を考察することができる。例えば卒業生の就職と在学生の学籍編入などの「善後処理」、成立時の経済的困難、東京から関西への事務所移転、東京への復帰などの歴史事実がすべて反映されている。会誌にはまた、戦後における卒業生の国内（大学、官公庁、研究機関など）の活動近況に加え、韓国、台湾同窓の海外活動を記録し、戦後母校の変遷を詳細に叙述している。

類似しているのは満洲国立佳木斯医科大学であるが、その関連史料は満洲医科大学と比べ多くない。『万里雲濤――満洲国立佳木斯医科大学記念文集』（1980）『満洲国立佳木斯医科大学記念資料集』（1978）、そして満洲医科系教育機関の連合同窓会である蘭仁会[9]の刊行した私家版史料『蘭仁会史』（1981）などもある。それらはすべて玉川大学教育博物館に所蔵されている。要約すると、こうした史料は満洲の医科系高等教育研究機関の戦後同窓会の活動と特徴を示しており、理系大学および文系大学と比較対照することができる。

それ以外では、他の満洲高等教育機関の同窓会史料も所蔵されている。例えば、旅順師範学院女子部、満洲国国立奉天工業大学、満洲国国立中央師道学院、南満工業学校、蒙疆学校、ハルビン学院などの史料である。南満工業学校は創立時期が比較的早かったので、同窓会関連史料は相対的に詳細である。すなわち『伏水会报』（No.1-45, 1961-2003）、同窓会創立 70 周年（1981）、95 周年記念誌（2006）などである。そして、韓国伏水会という海外同窓会組織がある。これは日韓同窓の交流実態を反映しており、相対的に高い史料価値がある。

9）蘭仁会は、満洲国国立大学チチハル開拓医学院、満洲国国立大学ハルビン開拓医学院、満洲国国立大学北安開拓医学院、満洲国国立大学龍井開拓医学院の 4 学院の教職員及入学者によって結成された会である（蘭仁会編『蘭仁会史』（1981 年）を参照）。

c. 他の私家版史料

湯治万蔵『建国大学年表』(1981)。建国大学同窓会により編纂・刊行されたこの年表は、1937 年から 1945 年までを対象とした建国大学の発展経緯および重要事件についての貴重な記録である。その主な内容には建国大学の創設の経緯、建学の精神、教授陣と学科設置の原則なども含まれる。さらに年代順に従って、学内の重要な講演、会議内容、学内で起きた事件と主な人物の心情・反応などを記録しており、史料集としても高い価値がある。『年表』は 1981 年に刊行され、建国大学同窓会編のその他の史料（『建国大学史資料』)、戦後各期同窓会の回想文の内容、塾生日記なども豊富に引用している。以上のように、『年表』からは、満洲高等教育を受けた経験から生じた「出来事」を記述し、支配しようとする意識を見出すことができる。こうして、建国大学の歴史を編纂するという営為にも、集合的記憶を構築しようとする意思が反映されていると見ることができる。

満洲国立大学ハルビン学院同窓会編『ハルビン学院史 1920−1945』(1987)。この『学院史』は「ハルビン学院史」、「ハルビン学院外史」、「資料と年表」の三部分に分かれ、第一部では、ハルビン学院の前身「日露協会学校」の時期からはじめ、満洲州事変後の日露協会学校の閉鎖、さらに満洲国の成立以降の発展経緯、終戦前の最後の学期等の内容も記録されている。その中で、ハルビン学院は「拓殖」に従って発展された歴史事実を記録し、二二六事件が学院の発展にもたらした影響や学科設置の変化についても記録されている。第二部「ハルビン学院外史」は、主として戦後同窓会の関連活動を記録しており、さらに各期卒業生の回想文、師友往来、友情に関する記録、戦後シベリア抑留の経験についても記録している。第三部「資料と年表」はハルビン学院の組織上の変化（1920−1945）および同窓会の主な活動について「行事年表」の形で記録している。他の同窓会が編集した史料と比べ、『ハルビン学院史 1920−1945』には多くの同窓生の個人的な記憶が集められており、その収集・刊行作業には、同窓会における当時の「出来事」についての支配的な意識も示されていた。

（2）中国語刊行史料

中国語刊行史料は主に 1994−1996 年に出版された。その中には長春市政治協商文史資料委員会から出版した『回憶偽満建国大学』（1996）、『回憶偽満新京工業大学』（1994）、長春工業大学編『長春工業大学校友記事』などがある。これらの出版物と日本語刊行史料との違いは、同窓会により編集されているとはいえ、編集過程に中国共産党当局が参加しているため、歴史資料としては統一された思想的傾向が記されている点である。すなわち中国人同窓生は在学中、学習の過程でマルクス主義に対する憧れを抱いており、侵略者と卒業生の闘争も行われていたという観点である。 そこでは中国同窓生の民族感情と革命熱情が反映されていた。

（3）韓国語刊行史料

建国大学在韓同窓会『歓喜嶺・建国大学在韓同窓文集』建国大学同窓会（1986）。この文集は 1986 年に刊行され、同年に日本語に翻訳された。建国大学の他の同窓会関連史料とともに玉川大学教育博物館資料室に所蔵されている。この在韓同窓会文集は、日本同窓会記念誌『歓喜嶺』と同じ名をつけており、韓国同窓会と日本同窓会の密接な繋がりを反映していた。文集には主として韓国同窓の戦後経歴が記録されているが、戦後の生活、近況、活動領域と連絡先などが名簿の形で記録されている。そこには同窓会誌の社会的なネットワークとしての機能が反映されていた。この回想文集を見れば、韓国の建国大学同窓生が朝鮮戦争に参加した経緯を知ることができ、また彼らが戦後韓国社会でエリートとして活躍していた様子も考察できる。また、日韓国交正常化後、韓国側の同窓会がある程度の社会影響力を利用し、積極的に日本側の同窓会と専門的な領域で協力し、日本への訪問活動を行い、また日本同窓の訪韓活動を接待したことなどもこの回想文集に記録されている。

第一部　満洲国の高等教育機関とその同窓会――先行研究又は歴史学的概観

第二次世界大戦後、まず日本で満洲国教育に関する研究が現れた。日本では、満洲国教育史研究会により監修された『「満洲国」教育資料集成 III 期

「満洲・満洲国」教育資料集成』（1993）では 1904 年から 1945 年までの関東州、満鉄及び満洲国の教育法規、学校教育内容、社会教育などの豊富な史料を収録し、満洲・満洲国 教育の多様な側面を示している。近年では九州大学の祝利が満洲国の日本語教育と教員養成について博士論文を発表した[10)]。祝は満洲における日本語教育の歴史的な観点から研究し、日本語教育は実に満洲国建国の精神および満洲国教育の核心を形成したと述べた。祝は満洲国政府が社会教育に大いに力を注ぎ、一面では、知識普及のために、「社会の中枢」と見なされた官吏、教員に対する教育を実施すると同時に、一般民衆に識字教育、実業教育などを実施し、社会全体の教育水準の向上に努めた。もう一面では、精神教育のために、「宣撫」、「宣伝」などの方策で民衆に満洲国の建国精神を鼓吹したと考察した。

しかし、このような多様な学校教育と社会教育を通して満洲国に役立つとされた人 材はいかに養成され、また、その人材養成にはいかなる特徴があったのであろうか。こうした問題は、卒業生たちの「記憶」の前提であり、その解明も本論文の重要様な課題である。例えば、満洲国の最高教育機関である建国大学は「アジア主義」と日本植民地支配の精神を反映したショーケースである一方、学生運動と反日団体の地下工作の温床もなった。建国大学は「アジア主義」思想と「五族協和」の政策方針に従って、日、漢、蒙、満、白系ロシア出身の学生たちが一緒に生活する特別な学校であった。しかし学生たちの理想は出身民族によって異なり、同床異夢であったといえよう。「満洲国」は、砂上の楼閣のように不安定な政権であり、その内部では統一性が欠如し、想像を超えた混沌と冲突が支配している。そのため、建国大学の一部の満系学生は、混沌と冲突の中で日本の植民地支配に反対し、反満抗日運動を戦った。その中に生まれた反植民地 意識と左翼運動も戦後彼らの生活に多大な影響を与えた。

竹中憲一の著作『「満洲」における教育の基礎的研究』（2000）では満洲に

10） 祝利『「満州国」における「民俗協和」下の人材養成と日本語教育』九州大学博士論文（比較社会文化）。

おける 朝鮮人教育について紹介している。第一章では、朝鮮人の早期移住の沿革から始め、朝鮮人教育の特殊性について紹介した。例えば、初期・前期・中期の移住原因、移住者出身地の分布・職業・経済状況および移住者人数の推移などである。第二章では、異なる時期における中国での朝鮮人教育の流れについて述べている。具体的には、清朝末期、中華民国初期の状況、教育権回収運動とともに朝鮮人教育の中で発生した変化などについて検討している。第三章では日本における朝鮮人教育を紹介している。間島における教育活動から始め、間島の政治的位置、統監府臨時間島派出所の設置、間島普通学校および間島における日本人教育など内容も含まれる。第四章と第五章では、満鉄付属地および臨界地区における朝鮮人教育について紹介し、さらに関東州で展開された朝鮮人教育についても触れている。「日韓学堂」・「日朝教学制度」などにも重点を置く。第四章第 9 節の部分では「万宝山事件」および「満洲事変」後の朝鮮人教育の状況について分析している[11)]。

この研究で竹中は、植民地当局と植民地朝鮮人の間に存在していた利益衝突と矛盾を明らかにした。時間の推移に従って、満洲地区における朝鮮人学校数、志望者数、入学許可者数および入学率も変化した。満鉄が行った朝鮮人教育の「拡大方針」も示されたが、満洲国の成立とともに推進された「共学制度」政策の実施、および急速に増加した朝鮮人生徒の進学希望が満鉄にとって圧力となった事実についても触れている。高等教育に対する期待は、朝鮮人に一連の運動を行わせられたが、朝鮮人の反日意識もその中から生み出されたという。竹中の研究によれば、植民地の行政官も上に述べた反日運動を恐れ、民族意識を抑圧するために、普通の高等教育を発展させず、かわりに実業教育の側面に重点を置くべくことと判断したという[12)]。

続けて竹中は、『「満洲」における教育の基礎的研究』において、満洲における教育活動を年表の形で整理している。考察の対象とした時期は 1897 年から 1933 年である。教育年表の作成にあたっては、関東局や南満洲鉄道株

11） 竹中憲一、『「満洲」における教育の基礎的研究、第 5 巻、朝鮮人教育機関』、柏書房、2000；178 頁。

12） 註 11『「満洲」における教育の基礎的研究、第 5 巻、朝鮮人教育機関』、180 頁。

式会社の関連機関の情報を利用している。例えば、関東長官官房文書課、関東都督府陸軍部、満鉄地方部学務課、満鉄庶務部調査課、満鉄総裁室地方部残務整理委員会、満鉄初等教育研究会などである。さらに満史会、教育史編纂会等の機関も含まれている。

そのほかに、この研究では多くの満洲教育関係資料を載せている。例えば、初等 学校、実業学校、女子学校、師範学校の教育資料、高等教育機関の教育資料などで ある。さらに一部教育機関の戦後同窓会に関する資料も載せている

第一章　満洲国の高等教育機関政策と高等教育機関

第一節　満洲国における高等教育機関

（1）満洲医科大学

満洲医科大学の沿革は、「奉天医院」時代、「南満医学堂」時代、「満洲医科大学」時代の三つの時代に分けられる。

1）奉天医院時代。1907（明治 40）年 4 月、大連病院奉天出張所が開設され、生川玉樹が所長に任ぜられた。1908 年 10 月、大連病院奉天分院と改称し、さらに 1912 年 8 月、医院規程の改正により奉天医院と改称され、内科、外科、眼科、産婦人科、歯科、口腔科の 6 部が開設された。1914 年 5 月には看護婦見習生 15 名が入学し、翌 1915 年 5 月、第 1 回生徒 15 名が大連医院に入学した[13)]。

2）南満医学堂時代。1911 年 5 月南満医学堂が設立され、大連医院長河西健次が医学堂長を兼任した。1911 年 8 月、勅令第 230 号により南満医学堂に関しては専門学校令によることが公布された。同年 10 月、日本人本科学生 20 名、中国人予科生徒 8 名に入学を許可した。1912 年 6 月、輔仁会規則を定め、発会式が開かれた。1915 年 9 月、第 1 回卒業生 10 名を送り出した[14)]。

13）　輔仁同窓会『満洲医科大学 40 周年記念誌』、「満洲医科大学四十年史」、1951 年 4 月、5−6 頁。

14）　註 13 に同じ。

3）満洲医科大学時代。南満医学堂は 1922 年 4 月に , 勅令第 162 号を以て満洲医科大学に昇格した。南満医学堂廃止後、中国人に対し実地医術を教授する専門部学則制定にともなって、中国人学生を対象とする専門部（4 年制、1 学年定員 40 名）も設置した。「尚本学入学志願者にして日本語を解せざる者の為に付属予備科を設置し、1 ヶ年間の予備教育を施すこととなった」[15]。

その学校の設立目的とは東アジアの大衆の衛生状態の改善であったが、大衆の医療保健の増進も目指されていた。その際、南満洲鉄道株式会社は、関東都督府の支持を得つつ、奉天附属地の大連医院奉天分院で南満医学堂を設立した。「蓋シ東亜ニ於ケル衛生状態ヲ改善シテ廣ク人類ノ保健ヲ増進シ且ツ優秀ナル斯道ノ人材ヲ輩出シテ社會ニ貢獻セシムルハ單ニ大東ノ文化ニ資スルノミナラス亦以テ汎ク世界ノ福祉ヲ裨補スル所以ナリ是ヲ以テ南滿洲鐵道株式會社ハ夙ニ明治四十四年ヨリ奉天附屬地ニ南滿醫學堂ヲ創設シ此カ目的ノ達成ニ努メタリシカ時運ノ進展ハ醫育ノ向上ヲ促スモノ切ナルヲ以テ既設ノ學堂ヲ基礎トシテ本大學ヲ建設スルニ至レリ」[16]。様々な学科の設置は主に医学理論の研究を目的としており、研究科を含むこのような「大学病院」の設立は、病気を治療し、患者を救いながら医療人材を育成するという意味を持ち、学生の状況にも配慮していた。予科は主に満洲人と中国人のために設置されていたが、学生間の交流と親善を図るために寮も設立された。

「本大學部各科ニ於テハ專ラ醫學ノ理論並其蘊奥ヲ攻究シ大學醫院ヲ置キテ應用ニ資シ更ニ研究科ヲ設ケ共ニ相倚リ相助ケテ斯道ノ發揚ト人材ノ育英トニ留意セリ、而シテ學部大學生ニ預備的教養ヲ施スタメ大學豫科ヲ設置ス、大學專門部ヲ附設シテ滿洲國人及中國人ノミヲ入學セシメ東亞ノ現狀ニ即シタル醫學技能ヲ授ク未タ日本語ヲ解セサル者ニハ豫科ニ豫備科ヲ附シテ日本語學ヲ教ヘ進ンテ豫科或ハ專門部ニ入ラシム、又日本人學生生徒ニ對シテハ特ニ支那語ヲ課シテ將來ニ資セリ就中寄宿舍ノ如キハ三國人ヲ收容シテ融合親善ノ實ヲ揚クルニ努メ（後略）」[17]。 中国語の重要性は始めてから示され

15） 註 13 に同じ。
16） 満洲医科大学『満洲医科大学一覧』、1934 年、3 頁。
17） 註 16 に同じ。

たのである。中国人学生は 1912 年から予備科に入学できた。中国人学生には奉天省の官費により学資が支給された。「大正元年（明治四十五年）十月（中略）奉天省官費派遣中國人ニ豫科入學ヲ許ス爾後数々奉天省吉林省瀋陽縣等官費派遣生數名乃至十數名ニ豫科入學許可ス」[18]。

満洲医科大学は日本の敗戦とともに閉学したが ,1945 年までに約 2,600 人（うち中国人は約 1,000 人）、総じて 17 期の卒業生を輩出した。終戦後、1945 年 10 月に八路軍により、また同年 11 月からソ連軍により管理された。1946 年 4 月、中華民国国立瀋陽医学院となり、1948 年 3 月、第 2 回瀋陽医学院卒業式（いわゆる満大第 21 期卒業生の卒業式）を開催し、1948 年 8 月、日本人教職員および学生のほとんどが日本に帰国した [19]。

（2）ハルビン工業大学

ハルビン工業大学の母体は 1906 年にロシアの下で東清鉄道の技術養成学校として設立された。その後 1920 年にハルビン工業大学が、ロシア式の工業大学の形で創立された。1928 年、中国国民党の北伐が完了し、関東軍は張作霖の爆殺事件以降、ハルビン工業大学を日本の都合の良い様にするため東省特別区工業大学と改称した。満洲事変以降、日本は満洲国の建設に取り掛る。そして 1937 年、ハルビン工業大学は満洲国立ハルビン工業大学と改称し、第一期学生を入学させた。翌年（1938 年）二期生として日系学生 30 名が入学した。1939 年にノモンハン事件が発生し、その後ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発した。満洲国立ハルビン工業大学の二期生の中には召集で出征した学生もいた。さらに二期生の場合、1938−1942 年の 4 年間の学習を経て、1942 年に卒業後すぐに入営した者もいた。

1945 年 8 月、ソ連が対日参戦し、8 月 15 日満洲国は崩壊した。その時ハルビン工業大学の六期生は繰り上げ卒業したが、七期、八期生は在学のまま学校の閉鎖を迎えた。六、七、八期生の中にはソ連軍によりシベリアに抑留された者もいた。1950 年 6 月 7 日、中国長春鉄道はハルビン工業大学の管

18） 満洲医科大学『満洲医科大学一覧』、1934 年、5 頁。

19） 輔仁同窓会『満洲医科大学 40 周年記念誌』、「満洲医科大学四十年史」、1951 年 4 月、5−6 頁。

理権を中国人民共和国政府に引き渡した。

1920 年の創立当時に鉄道技術者の養成を主としたハルビン工業大学は、1949 年までに 3,500 余名の卒業生を送り出した。彼らはアジア、北米、ヨーロッパ、オーストラリアなどの世界各国で活躍した。

ハルビン工業大学の戦後同窓会会誌『南崗』によると、海外の同窓で戦後各国の政府の要職に就いた人は多数を占めた。戦後、ハルビン工業大学は、中華人民共和国政府により接収され、中国第二の工科名門大学[20]として発展した。大学の創立記念大会も中国側により開催された。日本側の戦後同窓会は、2000 年に開催されたハルビン工業大学創立 80 周年記念大会に参加し、参会報告を発表した。その報告によると、校友として記念大会に参加した各国政府要人は以下の様であった[21]。

中国 : 李嵐清（中央政治局常任委員、国務院副総理 ）、李長春（中央政治局常委、広東省委員会書記）、呉官正（中央政治局常委、山東省委員会書記）、王兆国（全国政協副主席、中央統戦部長）、周鉄農（全国政協副主席）、劉積斌（国防科工委主任）、呂福源（教育部副部長）、宋法棠（黒龍江省省長）[22]。

大韓民国 : 金泳三 韓国前大統領（ハルビン工業大学名誉教授）。

（3）新京工業大学

新京工業大学[23]は、1937 年に「満洲工鉱技術学堂」として創設され、採鉱、電気、機械、応用化学、土木、建築の 6 学科が設置された。当時の臨時校舎は、新京の城後路に位置した。最初は、日本人（台湾、朝鮮籍も含む）向けの学校であったが、少数の中国人学生が満洲国政府の公費給費制度により入学を許された。学校の運営機構である理事会は、満洲国の国務院（民生部、経済部など）、関東軍および満鉄などから派遣された人員により構成さ

20） ハルビン工業大学同窓会『南崗――ハルビン工業大学日本同窓会誌』、第 10 号（1999 年）、22 頁。

21） ハルビン工業大学同窓会『南崗――ハルビン工業大学日本同窓会誌』、第 11 号（2000 年）、10 頁。

22） 以上の人名は『中国人名事典――古代から現代まで』（日外アソシエーツ株式会社、1993 年）を参照。参考した頁は以下。659、649、164、67、271、684、359 頁。

23） 中国人同窓生は、中国側刊行した同窓生回想文集では、新京工業大学を「長春工業大学」と称する。

れた。

満洲工鉱技術学堂は、1938 年に「国立満洲工鉱技術員養成所」と改称され、初代所長は満洲国民生部教育司長皆川豊治が兼任した。第一期生は 1938 年に入学した。1938 年から 1945 年まで、全 9 期の学生が集められ、1600 余名の同窓生が輩出した。その中で、中国人同窓生の人数は約 470 人であった（台湾出身者も含む）[24]。第一期の学生は 150 名であるが、その中で中国人学生は 20 名であった。中国人学生は 2 月 7 日に入学し、予備教育を受けることとなった。その後、日本人学生は 3 月末に来校した。4 月 4 日には開学式が挙行された[25]。

日本人学生向けの募集案内には「満洲工鉱技術学堂」という校名が書かれており、日本人学生に「旅順工科学堂」と同じ教育水準である学校と思わせた。しかし、彼らは入学してから、学校の正式名称は「技術員養成所」であることを知った。学校の建物も木造であった。さらに国防色の制服と戦闘帽などを見て、騙されたという気持ちを抱いた。日本人学生からの抗議に応じて、大学側は学制改革を行なった。日本人学生もその過程に積極的に参加し、学生自治会まで成立した。そのうち、中国人学生も学生自治会に参加し、自治会の代表に任ぜられた者もいた[26]。この過程では、満洲国国務院長官星野直樹、民生部次長田村敏雄、経済部次長岸信介、大陸科学院院長鈴木梅太郎、関東軍参謀金子定一、南満洲鉄道株式会社、満洲電業株式会社等の企業代表も学校を訪ね、学生の改革要求を支援し、講演活動なども行なった。

1939 年 1 月 1 日、校名は「国立大学工鉱技術院」と改称され、1 月 15 日中国人学生が入学した。武田清が院長に赴任するとともに、採鉱冶金学科が分離され、冶金学科が増設された。学制もその時一変して、大学本科 3 年、予科 1 年となった。満洲国における新学制によると、国民高等学校は 4 年制

24）『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997 年。

25）『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997 年、15 頁。

26）『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997 年、16 頁によれば「この中で、学生自治会が結成され、学生運動を指導する 7 名の委員が選挙によって選出されました。この 7 名の学生委員は、採鉱学科一期生の庄司美智郎をリーダーとして、他の 6 学科から日本学生の代表と、中国学生代表の葉永春が選ばれました」。

であるが、日本内地では中学校は 5 年制であった。1 年間の予科というのはとくに中国人学生のために設置された制度だといえよう。1940 年 9 月 5 日、学校は「国立新京工業大学」と改名し、武田清は初代学長に任せられた。1943 年に長谷熊彦が第二代学長に就任するとともに、通信学科が開設された。1945 年まで、全九期の学生が在籍し、1945 年 8 月 15 日の終戦および学校の閉鎖まで、六期の学生が卒業した。

新京工業大学については以下のような特徴がある。まず教職員には、教授（ほとんど日本人）を除いて、大陸科学院研究員、満洲鉱業開発所研究員もいたが、そのなかには台湾、朝鮮、または中国大陸出身者もいた。さらに新京工業大学は、大陸科学院および満洲地区各工場と密接な協力関係があったが、学生は毎年の冬休みと夏休みに、満洲における工場で校外実習活動または卒業設計などを行うことができた[27]。新京工業大学の教育管理はかなり厳しいと評価された[28]。入学試験合格率は約 10% であるが、入学してからも各学年の期末試験は非常に厳しかった。当時の 100 満点制では、二つ科目に 60 点以下がある場合は不合格となり、50 点以下の科目が一つでもある場合には留年扱いとなった。また、学校のルールも厳しかった。学生の日常生活は軍隊式に行われており、自由に外出することは禁じられていた。

（4）建国大学

満洲事変勃発以降、1932 年 3 月 1 日に満洲国が設立された。1934 年 3 月 1 日に満洲国では帝政が実施され、執政溥儀は満洲国の皇帝となった。1935 年 4 月 2 日溥儀は訪日に出発し、1 ヶ月後、『回鑾訓民詔書』を発布し、建国精神に従って、日本天皇に忠誠を誓った。その様な歴史を背景として、1936 年 11 月に建国大学建設計画が研究・検討された。当初、辻政信と石原莞爾は満洲でアジア大学を創設する計画であったが、満洲国の建国精神と王道政治に対応する大学の建設案に妥協した。

1937 年 3 月 26 日建国大学創設の方針が固まり、6 月までには建国大学の

27）『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997 年、24―25 頁。
28）『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997 年、26 頁。

創設要綱案、予科第一期生徒選抜要領案、建国大学令（案）、学科及び実科編成案、建国大学研究院創設趣意書が起草された。総長は当時の満洲国国務総理張景恵であり、1937 年 7 月 16 日、統制経済学者である京都大学経済学部教授作田荘一が建国大学副総長に任ぜられた。建国大学では満洲国の建国精神と民族協和理念が強調され、満洲国の「棟梁」になるべき人材の養成を目指していた[29]。

学生を募集する時からいわゆる民族協和原則が守られ、「共学共寮」制度が導入された。すなわちすべての学生は寮で一緒に勉強し、暮らすこととなった。しかし、その様な「民族協和」精神が強調されていた大学でさえ、中国人学生の間では反満抗日感情が芽生えていった。1940 年には、彼らは反日的な政治色を持つ「読書会」に参加し、校外の組織と連絡を保ち、反満抗日運動に参加した[30]。

建国大学は 1938−1945 年の間に第一期から第八期までの学生を募集した。戦後には、一部の日本人学生がシベリア抑留を経験し、また中国人学生の一部は延安に向かい、中国共産党に参加した。国民党に参加した中国人学生は戦後の中華人民共和国で非常に大きな政治的打撃を被り、冷遇された。韓国では建国大学の同窓会もできたが、日本の同窓会は 1951 年から 2010 年まで積極的に活動していたため、本論文にとって好個の研究対象となる。本論第二部では建国大学の建学・崩壊・戦後同窓会などについてさらに立ち入って分析し、第三部では出自が異なる卒業生集団の満洲記憶について考察する。

第二節　関東州における高等教育機関

(5) 旅順工科大学

旅順工科大学は 1909 年に日本政府が関東州旅順に設立した官立旧制大学であり、その前身は旅順工科学堂であった。前年の 1908 年に関東都督大島義昌は総理大臣桂太郎宛てに、「旅順工科学堂創立覚書」を提出した。その

29）湯治万蔵『建国大学年表』、建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981 年、9—62 頁。
30）詳しくは本稿第二部を参照。

覚書で大島は「由来満蒙の地は、人文蒙昧にして百工未だ挙がらないといえども、土地広く、人口日に加わる。一旦文明の緒につかば、諸般の工業踵を返して勃興し、ために工芸技術の士を要すること（後略）」と書いて、旅順工業学堂の計画書を添付した。1909 年 3 月 8 日に第 26 回帝国議会でその予算案が通過し、旅順工科学堂の官制に関するする公布が発表された。

旅順工科大学の同窓会誌『旅順の日』は、明治時代の旅順工科学堂の歴史的意義について、後藤新平の感想を引用している。「そもそもが最初本学堂設立の必要を感じる由来は（中略）露国政府は旅順を以て極東における政治的軍事的策源地となすべく、国費を惜しまず雄大の経営を成したるが、これを継承したる我が帝国は、いかにしてこれを経営すべきか（中略）この土地は他の方法によりて旅順の価値を認め、経営を生かさざるべからざるに至れり（中略）余が旅順を東亜における文明的経営の策源地たらしめんがため、まず一大学を設立すべしという余の意見は、偶然にも桂公（桂太郎）の意見と一致し、ついに幾多の苦心と曲折とを経ていよいよこれが実行を見るに至れり。（中略）第一露国造営の海軍工場を利用する便あり。その他海軍兵団海軍病院等利用すべきもの甚だ多きは幸いなり、海軍省ともこれら建物及び機械類を無償にて交付を受くる約束なりしに、その後政治的変動のための好む所にあらざりしも、満洲を去りて内閣に入り（中略）旅順はわが租借地にありて日中露三国の交渉あり、最も神聖にして偉大なる名誉ある日露の戦跡は、学生の修養に絶大の感化を与うることを得るべし」[31]。旅順においてそのような大きな学園を建設することは、後藤によると、旅順を学園都市として建設するとともに、満洲の経済発展にも役立つというのであった。

1910 年 4 月 20 日には始業式が挙げられ、その後毎年の 5 月 10 日は旅順工科学堂の「開学記念日」と定められた。1909 年 9 月の府令により、旅順工科学堂に機械工学科、電気工学科、採鉱冶金科が開設された。1916 年には予備科が設置され、中国人学生は予備科で予備教育を受け始めた。旅順工

31） 後藤新平『学堂設立の趣旨及由来並びに将来の学堂に対する希望』（1915 年 10 月 11 日演説）、旅順工科大学同窓会『旅順の日――旅順工科大学同窓会 60 周年記念会誌』六十周年記念誌編集、1973 年 5 月。

科大学同窓会記念誌は、旅順工科学堂の特徴を以下のように述べている。学生には「興亜の士」の標準で軍事的な管理を行なっており、学生に「全寮主義」的な生活習慣の修得を求めた。学校ではさまざまな伝統的な文化活動を行った（ダイナマイト節、寮歌集の編集やストームなど）[32)]。

1922（大正 11）年 3 月 31 日の勅令 160 号によって、「旅順工科学堂」の廃止とともに , 官制「旅順工科大学」が公布され、大学と改称された。この変遷は、同窓会刊行文集では「昇格運動」と呼ばれた。この昇格は日本内地において大阪工業大学が大阪帝国大学工学部に昇格した 1929 年より 7 年ほど早かったため、旅順工科大学の卒業生とっては自慢できることだと思われた [33)]。

その後、1926（大正 15）年 2 月に大学官制の一部が改定され、付属専門学校が廃止され、同年 4 月に大学での講義が始まった。その後、1928 年 5 月 10 日に正式に開校式が行われた。 1938 年 4 月、付属臨時技術員養成所が設立された。大学設立後、学科が追加された。応用化学科は 1936（昭和 11）年 6 月に設立され、航空学科は 1939 年 4 月に設立され、教養学科は 1942（昭和 17）年 4 月に設立された。 1941 年 7 月の統計によると、旅順工科大学には 40 人の中国人学生を含む 320 人の予備学生がいた。 大学本科の場合は、20 人の中国人学生を含む 260 人の本科の学生がいた。

1945 年 8 月の終戦後、ソ連軍は 8 月 22 日に旅順に入り、旅順と外界とのつながりを切断した。最終卒業式は 8 月 25 日に行われ、大学は 9 月以降ソ連軍に接収された。大学本部は 10 月 7 日に大連に移転した。この時、大連にさまざまな大学本部が集まった。その後、1946 年 11 月 30 日に本部が閉鎖され、旅順工科大学の歴史は終わった。

32） 旅順工科大学同窓会『平和の鐘――旅順工科大学同窓会 90 周年記念会誌』九十周年記念誌編集、2000 年 12 月、第 19−20 頁。

33） 註 32、『平和の鐘』21 頁。

第二章　各教育機関の概要と同窓会の特徴

第一節　戦後同窓会の規模

興亜技術同志会

興亜技術同志会は 1913 年 12 月に成立された。その際、人数は少なく組織もまた確立しなかったが、助教授として旅順工科学堂に残り、のち満鉄に入社した関真が初代幹事長となった。その後、白仁武学長が興亜技術同志会の会長となり、本部組織を固め、各地の同志会成員間の連絡を強化し、『大陸工報』を毎月刊行した。その『大陸工報』は単なる同窓会会報というだけでなく、興亜技術同志会が、名実ともに大陸における先端技術開発の責任を遂行してきたことを意味した[34)]。1934 年に大連に技術会館が設置され、同所に本部事務所が開設された[35)]。

その際、満洲技術協会が『満洲技術協会報』を発刊したが、その後『大陸工報』と合流し、新たに『興亜技術同志会月報』を発刊した。1932 年に、その『月報』を『興亜』と改題した。一方、戦局が厳しさを増してくると、『興亜』の発刊も一時断絶することになった。終戦につぐソ連軍の大連進駐によって、同窓会事務所も閉鎖された。引き揚げまでは幹事長の住所において連絡事務が進められたが、1947 年 3 月に、相田秀方幹事長が東京に引き揚げてきたときには、湯浅忠平東京支部長を暫定会長に推した。その時、「霊陽技術同志会」の名の下に各支部役員の活躍によって、引揚げてくる成員との連絡も次第にとれるようになった。1952 年 5 月 10 日に、興亜技術同志会は創立 40 周年を迎え、同志会はその後も会員の事業とともに発展してきた[36)]。

終戦後、日中関係も新たな歴史的転機を迎えた。相田秀方幹事長は 1955 年以来 2 度の訪中活動により、終戦以降の日中関係の改善に大きな奉献を行った。1966 年の総会には、「興亜技術同志会」は正式に「旅順工大学同窓

34）「興亜技術同志会・旅順工大同窓会略史」旅順工大同窓会『旅順工大創立六十周年記念誌――旅順の日』1970 年、1–3 頁。
35）註 34 に同じ。
36）註 34 に同じ。

会」と改称し、会誌も『旅順』に改題された。

輔仁会

輔仁会は満洲医科大学の同窓会組織であり、1946 年に設立された。輔仁会の同窓は、日本の復興と共に、日本の医学界でそれぞれの地位を確保し活躍した。輔仁会によって刊行された『満洲医科大学同窓会刊行資料 柳絮地に舞ふ―追補』（1984 年）には、日本側、中国側同窓の寄稿が収録され、そこでは戦後の「善後処理」などから始まる輔仁会のさまざまな活動について記述された。輔仁会の発展経緯についても、寄稿した同窓生の個人的記憶の角度から、詳しく記録された。その際、輔仁会会長である熊田正春はこの段階の歴史を「母校を失った同窓生の苦難の立上りからの歩みであり、その後同窓会の動向、推移の歴史を綴った」と表明した[37)]。

輔仁会の戦後の機能について、『追補』では以下のように表現している。「太平洋戦争は終結を迎え、満洲医科大学の終焉をとげた。職員も学生・生徒もなす術もなく今後の運命の行方に戸惑った。中国人の暴動、ソ連兵の進駐と戦後の奉天の移り変わりは目まぐるしかった。生命の保障だけはまあまあと感じ取れたものの、行末は暗たんたるものであった」[38)]。その時期の輔仁会の主な機能は「学生生徒日本の大学への転入学」、「学位問題」、「職員の日本での就職」の三つであった。

会報によれば、輔仁会の成立当初の重要な人物は伊藤尹であった。伊藤は南満医学堂を卒業してから大野章三病理教室で研究し、その後九州の野口病院で 7 年間副院長を務めた。彼は外科・甲状腺の専門家であり、1937 年に東京都渋谷区に伊藤病院を設立した。その後、東京大空襲により、伊藤病院は山梨県に移動した。1946 年に、満洲からの引揚げにより、満洲医科大学の同窓生は日本に戻り、輔仁会の本部が誕生した。1951 年に開催された輔仁会の総会では伊藤尹の貢献を多としたが、同時に同窓会の本部を大阪へ移転することを決定した。当時、日本全国には 10 数か所の同窓会支部があっ

37） 熊田正春、「序文」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）

38） 熊田正春、「満大善後処理事務所の成立と学生生徒転入学の経緯」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）、8−13 頁。

た。1957 年に大阪本部の運営人員の人手不足のため、ふたたび伊藤病院に同窓会本部を移転し、伊藤を輔仁会の副会長に選出した。「善後処理」が一段落ついてから、各方面の人事工作も順調に進められた。「輔仁学術座談会」も開催され始めた。座談会には、常に有名な専門家が招かれた。彼らの特別講演会では、会員は日進月歩の医薬学の新しい知識・技術について専門的に交流し討論した。

戦後の輔仁会の歩み、とくに本部の動きについては、熊田が以下のように記している。「伊藤尹先生即ち伊藤病院を中心として諸先輩の努力と、会員の団結で今日（中略）かつて満洲医科大学で学んだという共通の意識は、会員相互の連帯となり強固な絆となって発展して行ったのである。戦後伊藤尹幹事長の尽力により、昭和二十六年四月、東京目黒の雅叙園における全国的な同窓会が、戦後初めて華々しく行われ、ここに母校なき同窓会の基盤が確立されたと言えるだろう（後略）」[39]。『柳絮地に舞ふ―満洲医科大学史』に寄せられた原稿を読むと、全国各地に分散した輔仁会員が相寄り、助け合い、次第に同窓会支部が活発化する状況がつぶさにうかがえる。1980 年以降、中国においても同窓会が結成される気運が醸成された[40]。

第二節　戦後同窓会の活動の特徴 —— 輔仁会を中心に

輔仁会の戦後の主要な活動は以下の如くであった。1, 善後処理。学生の転入学、学位問題、そして就職手配など。2, 各支部を結成すること。3, 会誌・会報を刊行すること、同窓会刊行物によって同窓生ネットワークを強化すること。4, 定期的に医学交流活動を行うこと。

その過程には教授や同窓生の間でのキャリア上・生活上の提携と相互支援が反映されていた。『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』にはその提携について具体的な例が幾つか言及されている。「その頃、京城帝国大学医学部の今村（今村豊）教授は胡蘆島を経て奉天に来ておられた。満大の鈴木

39）　熊田正春、「満大善後処理事務所の成立と学生生徒転入学の経緯」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）、8−13 頁。
40）　熊田正春、「序文」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）

（鈴木直吉）教授に『日本政府文部省では教授が代表となり、資料を整えて交渉しなければ相手にしない』と伝えた。鈴木先生はその週の教授会の席上でこのことを報告したが、当時の教授では各教授とも呆気にとられたようでほとんどがそのまま満洲に居残れると思っており、先生の発言には耳もかさず何の反応も示さなかったと鈴木教授から聞かされた。その後、鈴木教授の斡旋で三項目の交渉の満洲医科大学の代表となり、日本に戻って以下の項目について各方面と交渉した。鈴木教授は、満洲医科大学代表としての委任状も証明書も持たず自らその役を守中清学長に買って出る結果となって、文部省並びに厚生省への折衝の満洲医科大学代表に決定したのであった。大学関係の書類作成は、大学庶務の斎藤寛一氏がその任に当たった」[41)]。

資料によれば、輔仁会は戦後以下のように推移した。「輔仁会本部は一時関西の山岡義郎先生に移った。本部は関西から九州へとの話もあったが、やはり本部は東京にという事で昭和 32 年より再び東京に戻った」[42)]。本部の関西移転について、同窓生の上田三郎は以下のように述べている。「輔仁会の本部が関西に移され事務所を第一病院に置く理由は関西から東京に次いで同窓生の数が多いという事、すなわち第一に松浦先生第一病院の医師の九割が満大卒業生で占められている実情と、第二に病院形態であるため種々な連絡や輔仁（会報）の発行に最善の場所と考えられたものと思う。本部が第一病院に置かれている間に 4 年一度の全国医学総会が京都で開催された。この機会を利用し輔仁同窓会が京都の料亭で行われることになった」[43)]。

輔仁会報は戦後始めの 10 年の間に、同窓間の連絡という機能を果たした。同窓会が編集した同窓会名簿には「1955 年を過ぎた頃より、同窓会員も夫々、そのところを得、大いに満大の実力を示し始めた。そして会員名簿を作ることにした。1957 年 4 月、名簿が出来上がった」[44)]。輔仁会の会誌は「輔仁」

41） 土方文生「東北地区出身学生の転入学の実際――東北帝国大学及び新潟医科大学への転入学」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）13−22 頁。

42） 前原裕「戦後の輔仁会を語る」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）34−36 頁。

43） 上田三郎、「輔仁会本部関西に移転」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）36−38 頁。

と命名され、一年 4 回発行された。「当時終戦後日本に引き揚げ、復員、安住の地を求めて日本全土に我々同窓生が移動している最中だったので、輔仁誌の果たす役割は近況交換、住所移転の通知が主な任務だった」[45)]。

その後、同窓会の発展とともに、輔仁会も地方に支部を設立した。その支部は北海道支部も含めて、東北輔仁会、静岡県支部、近畿支部、京滋支部、兵庫支部、愛媛県支部、山口県支部、福岡県支部等[46)]。輔仁会北海道支部の結成については以下のように記録されている。「輔仁会北海道支部の初会合は、1947 年夏、札幌で行われた。集まったのは終戦後北大医学部（北海道大学医学部）に転入学した学生が主で、満洲医大卒の所謂先輩は折居（折居圭三）と伊勢（伊勢俊明）の二名だけであった。芝生の上に車座になって牛乳とコッペパンだけのご馳走であったが、それでも元気に「東亜の文華」と校歌を大声で歌ったことを懐かしく思い出す。そしてその時支部長は折居にすること、また次回からできるだけ多くの北海道在住の輔仁会員に出席してもらう様に勧誘すること、兎も角毎年この支部総会を開くこと等を決めて散会した」[47)]。

当時の支部の構成員は、引き揚げてきて仕事を再開した医師と、アルバイトによって生活を支えていた学生であったから、経済的には必ずしも恵まれず、従って初期のうちは年一回の支部総会も学生寮や会館等を借りて行われた。1957 年以降の北海道支部の総会開催の様子や会員の動向または現況等については、伊勢俊明が以下のように述べている。「当支部が設立当初に、会員諸君が年一回は必ず支部の会合を開こうと決心したことがその通りになり、現在に至るまで休会した年は全然なく、三十五年にもなんなんとする長い間続いて来たことは、驚異的とも言えることで本当に嬉しく思っている」[48)]。

44） 前原裕「戦後の輔仁会を語る」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）34−36 頁。

45） 前原裕「戦後の輔仁会を語る」、『柳絮地に舞ふ（追補）― 戦後の輔仁会』（1984 年）34−36 頁。

46） 『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）。

47） 折居圭三「北海道支部の結成と今日までの経過」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）38 頁。

東北地方の輔仁会については , 同窓生高坂知浦が寄稿「東北輔仁会のことども」で以下のように述べている。「1947 年から 1948 年にかけて我が満大同窓生がボツボツ引き揚げて来た。その後は毎年開きたいと念願しながら、引き揚げ後の生活再建に力をそがれ、その余裕がなかったというのがというのが実情である。（佐々木統一郎先生と連絡がついた後）先生は宮城県塩釜市に居を構えられ、大勢の同窓、後輩の面倒を見ておられた。そうこうしているうちに、佐々木統一郎先生から小生に連絡があり、宮城、山形両県合同の同窓会をやらないかとの提案があった。結構なことなので山形県の諸君と相談の上、両県の中央に当たる天童市で開催することになった。1963 年のことである。そうこうするうちにこの会を東北全県に拡げようという話になり、翌年秋田から振り出すことになった。その後青森、盛岡と順次に廻り始めたのであるが、その間秋田の同窓生をはじめ、岩手の阿部鹿次郎、宮城の伊東市男等は最も熱心に会を取り仕切っていただいた」[49]。

それ以外は、輔仁会成員も戦後に積極的に寮歌祭に参加した。寮歌祭と輔仁会については、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』に以下のように記されている。「1961 年 10 月 7 日第一回日本寮歌祭が東京後楽園の近くの文京公会堂において開催された。満大予科等 21 校が参加しているが、いわゆるナンバースクールでは三高だけであった[50]」。

第三節　戦後同窓生のキャリア――輔仁会を中心に

輔仁会は戦後日本で同窓生の間における医学新知識と技術の架け橋となった。善後処理が終わってから、輔仁学術座談会と医学交流活動などは日本国内から海外へと展開していった。

まず、日本国内では、戦後輔仁会における同窓間のネットワークが充分に

48）　伊勢俊明「北海道支部の現況」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）38 頁。

49）　高坂知浦「東北輔仁会のことども」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）、42−44 頁。

50）　註 49 に同じ。

反映された。満洲医科大学同窓会刊行史料『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』に、戦後の満洲医科大学の大学・研究所関連分野で活躍している同窓生についてのアンケート調査が行われた[51)]。そのアンケート調査を通じて、輔仁会は同窓の戦後医学界におけるキャリアおよび成果を詳細に記録した。終戦直後から始め、引揚げ、帰国、善後処理期、その後の日本国内・海外でのキャリア状況、学術活動などについてすべて記録された。

そのアンケート調査によれば、満洲医科大学の同窓生には少なからぬ細菌学・病理学の専門家がいた。一部の初期の学生は、卒業してから関東軍に所属し、軍務に就き、終戦後に復員した。アンケートによれば、彼らの多くは1947−1948 年の 2 年間に葫蘆島を経由して帰国した。終戦後、1945−1947 年の三年間、一部同窓は中国で国民党政府の管理下の医療機構に入り勤務した経験をもつ。例えば、森川義金は終戦前に財団法人大連医院研究部長（病理科兼細菌科勤務）として勤務し、終戦後には国民党に雇用され、中国長春鉄路公司大連中央鉄路研究部医長に任ぜられた[52)]。山本義男は、1945 年 12 月から国民党政府により留用され、長春大学医学院病理学専門の教授として雇用された[53)]。大石省三は、戦後 3 年間満洲医科大学の眼科の助教授として働いたが、瀋陽医学院眼科教授として転職した。黒子武道は、1945 年 4 月に関東軍衛生部幹部教育部で見習いとして勤務し、新京の第二陸軍病院で戦争の終結を迎えた。その後、彼は中国国民党政府に留用された[54)]。

そのほか、一部の同窓生は中国の内戦の後にも中国東北に抑留され、中国国民党政府により留用されたが、中国共産党の東北地区占領の後も彼らは留用され、医学専門家として働き続けた。前に記した山本義男は、1948 年以降中国人民解放軍長春第三軍医大学病理学教授として勤めたのち、1953 年に留用解除され、帰国した[55)]。武内睦哉も、山本と同じく、瀋陽医学院生理

51） 国行昌頼「大学（研究所）関係同窓生の活躍動向アンケート調査」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）、125−148 頁。
52） 註 49『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』、125 頁。
53） 註 49『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』、128 頁。
54） 註 49『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』、137 頁。
55） 註 49『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』、125 頁。

学科主任教授（国民党の支配下）から、中国医科大学生理科教授（共産党の支配下）として勤め、1953 年に留用解除されて日本に帰国した[56)]。

輔仁会の同窓は戦後に日本国内の衛生健康事業に尽力した。満洲医科大学同窓生のなかには戦後に国立療養所の所長として務めたものも多かった。国立療養所は戦時中各県に一ヶ所軍事保護院の管轄のもとに設立された傷痍軍人療養所であり、軍人軍属の肺結核患者を収用していた。戦後には、住宅難、食料不足、環境不良などの原因により肺結核患者の数は激増していた。その状況を改善するために、日本では 1946 年から 1954 年の間、国立療養所は 183 箇所に、肺結核病床は 64,500 床にまで増設された[57)]。国立療養所所長を務めた藤田和雄は満洲医科大学同窓生と国立療養所について、次の様な評価を行っている。「各療養所長は、目まぐるしく変化する時代の要請を素早くキャッチし、自分の管理する療養所の現状とにらみ合わせつつ、厚生本省からの、上からの指示にたよらず、所側のイニシアチブで療養所の性格づけに努力し運営してきた。いわば、戦国時代の一国一城の主たるべき心情であったといっても過言ではあるまい中略我が満大同窓生の活躍は他の大学卒業生に伍して、一段とめざましいものがあったことは自他共に許すところであろう」[58)]。

第四節　戦後同窓会と外交関係

日本戦後同窓会は会員の引き揚げ後の生活の建て直しとともに、安定的な生活を得て、同窓会を充実しながら社会の各分野で活躍していた。日本と隣国の国交回復とともに、隣国との科学技術・文化などでの交流の使命を遂行する同窓会に変わりつつあり、隣国との友情の架橋ともなっていた。

新京工業大学同窓会における訪中活動

新京工業大学の場合は、「日中友好技術者訪中団」および「朋友会訪中団」

56）　註 49『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』、133 頁。

57）　藤田和雄、「満大同窓生国立療養所長列伝」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）、149 頁。

58）　藤田和雄、「満大同窓生国立療養所長列伝」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）、155 頁。

の名の下に、中国東北地方を主として、2 回の訪中活動を行った[59]。新京工業大学の訪中活動は同窓会訪中記念誌に載せられた。そこには中国人同窓生の寄稿も掲載された。その際、在学中に反満抗日運動・地下読書会に参加した中国人学生[60]も懇親会に出席し、満洲時代における学生の間での民族的葛藤を互いに諒解した。懇親会に参加した中国人同窓が次のように日本人同窓に挨拶し、中国側の立場から学生時代の軋轢に対して語っている。「第一期生が学校から出たのは 1941 年の春で、1940 年から今年の 1979 年まで、丁度 38 年になる。（中略）38 年の間、世界各国で多くの変動があったが、中国と日本の変動が最も夥しいものであった。（中略）中国と日本は近く 100 年以来、幾多の不幸な事態が起りましたことで、両国人民の友好往来を妨げ、これは全く日本軍国主義者のやったことで、日本人民と何も関係がないものである」[61]。さらに「過去の不愉快なことはもはや新しい友誼にかえられ、われわれが面会できたことは又、中日両国政府の支持と同窓生自身並びに各界友好人士の努力に負うところが多いものであろうと思うのである」[62]。

一方、新京工業大学同窓会訪中活動に参加した日本側の同窓も会誌で母校における学生時代を回想しながら、中国同窓との友好関係を目指し、中国に対する積極的な態度を伝えている。具体的には、次のような語りが普遍的である。「この度の訪中で特に感じたこと。流石に中国は雄大でスケールが大きい。バスの中からまた汽車の中から。あるいは名所旧跡の訪問で一桁

59） 新京工業大学校友訪中団の記念誌『朋友們――私たちの母校訪問記』によれば、第一次訪中団は 1979 年 11 月 23 日～ 12 月 6 日に北京・瀋陽・撫順・ハルビン・長春を訪問した。第二次訪中団は 1980 年 4 月 28 日～ 5 月 7 日には大連・瀋陽・撫順・長春を訪問した。

60） 新京工業大学同窓会『朋友們――私たちの母校訪問記』によれば、挨拶して懇親会参加した中国人同窓は以下である。高向適（機械 1 期）、高旭徴（採礦 1 期）、汪振山（建築 1 期）、王著（建築 1 期）、丁明新（電氣 1 期）、孫書棋（應化 2 期）。そのうち、1996 年に中国側同窓会誌である『旧「満洲」国立新京工業大学中国人学生の記録』に反満抗日運動および革命活動についての文章を掲載した同窓が高向適、高旭徴、汪振山、丁明新などである。

61） 高向適「中日両国の平和友好は両国人民の根本利益に合致」、新京工業大学母校訪問団『朋友們――私たちの母校訪問記』、1980 年 10 月 1 日、11 頁。

62） 王著「同学の集合により輝かしい展望を開こう」、新京工業大学母校訪問団『朋友們――私たちの母校訪問記』、1980 年 10 月 1 日、13 頁。

違っているという感じを持ったのは私だけではあるまい」[63]。「何を書いてもほんの一部のような気がするが、強いていえば大きな国、息の長い国だなと思った。かつて日本のした事を忘れた訳ではないが、一衣帯水の隣国で長いつき合いを考えてくれる有難い国、頼りになる大事な隣人との思いを深めさせられた」[64]。さらに日本同窓は、日中友好の雰囲気が当時の中国東北地区にあふれていた様子に驚いている。「日中友好の気運が各地で見られたが（中略）瀋陽での一晩、鈴木君と唐昆[65]君の家に招かれた。（中略）『唐［昆］君が日本語うますぎるので、私達は中国語を学ぶ要がなかった。中国語が話せないのは唐君のせいですよ。』ただ唐君が『僕等は自分の子供に日本語を教えているが貴君達も子供に中国語を学ぶようにしてくれよ。』といわれたのには本当に参った」[66]。

さらに、新京工業大学の日本人同窓生も中国に対する郷愁に似た感動を感じていたが、中国が開発途中国であるという事実も客観的に認識していた。「バスが止まり我先と降り立ち（中略）夢中でカメラのシャッターを押しまくった。樹木の大きくなったことは聞いていたので驚ろかなかったが、改めて年月の長さをお思い知られた。（中略）今まで生きていて良かった、俺の青春の跡を確めたぞって腹の底から思った」[67]。

満洲医科大学同窓会における医学交流活動

満洲医科大学同窓会である輔仁会の場合は、戦後医学交流の形で、中国を訪問して、中国人同窓および医学会同僚と医学交流を行なった。その時、どの名目で交流活動をすれば良いかについて、輔仁会で検討されている。満洲という言葉は中国にとって侵略の代名詞ですらあった。そしてその医学交流が、満洲医科大学の中国医学交流を目的とする東方医学研究会の名の下で行われることになった。

63） 井下国明「感じたことあれこれ」、注 62『朋友們――私たちの母校訪問記』、18 頁。
64） 千葉誠幸「夢のようであった訪中」、註 62『朋友們――私たちの母校訪問記』、27 頁。
65） 新京工業大学の中国側同窓会誌では、反満抗日運動および中国革命に熱心に参加していた人物として記録されている。
66） 長連全「思い出の数々」、註 62『朋友們――私たちの母校訪問記』、21 頁。
67） 千葉誠幸「夢のようであった訪中」、註 62『朋友們――私たちの母校訪問記』、27 頁。

さらに、輔仁会同窓は戦後日本と海外の医学分野でも積極的な交流活動を行った。一部の同窓の交流経歴について簡単に述べたい。前掲のアンケート調査によれば、多数の卒業生は日本国内および海外で優れた研究業績を挙げた。たとえば牧野堅は 1949 年から日本ビタミン学会の評議員となり、1961 年にモスクワで開催された国際生化学会で講演した。彼もアメリカ国立衛生研究所、タフト医科大学及びウィスコンシン大学癌研究所で招待講演を行った[68]。それ以外にも椢本義衛は 1946 年 8 月に中国領モンゴル自治邦政府中央医学院の教授として働き、終戦後の 1947 年 2 月に、邦人送還の米軍の LST 船で船医として勤務した。1947 年 4 月から広島市役所保健課にオーストラリア進駐軍の軍医の技師として勤務した[69]。一方、松尾吉恭は、癩病の専門家として、1953 年からライ菌の研究に専念した。彼は 1965−1966 年、1967−1968 年に 2 度訪米し、それぞれ一年間、ライ病研究を行った。その後、1975 年に、松尾は外務省の委託により、インドから訪日した医師を教えた経験を持つ。1975 年以降、松尾は文部省短期在外研究員としてアメリカ合衆国、ベルギーおよびドイツ連邦共和国の主として癩病研究事情を視察、1978 年厚生省よりアメリカ合衆国の癩病研究状況の視察を行った。1978 年以降、タイ、フィリピン、韓国の三国における癩病の化学療法共同研究に顧問として参画した[70]。

第五節、語りと記憶

（1）日本人同窓生の語り。

『満洲医科大学同窓会刊行資料 柳絮地に舞ふ――追補』に記録された同窓生の語りは三つの大きな部分に分かれている。すなわち、1）善後処理、2）輔仁会の歩み、3）輔仁会員の活躍である。寄稿には輔仁会同窓の満洲記憶が記録されていたが、その中で特に満洲医科大学の同窓のあいだで共感を

68） 国行昌頼「大学（研究所）関係同窓生の活躍動向アンケート調査」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）、126 頁。
69） 註 68『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』、130 頁。
70） 註 68『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』、139−140 頁。

持って使用されている用語と表現がある。さらに、特定の人に対する思い出も紙面を賑わしている。

「ブタマン会」

熊田正春の回想によると、輔仁会は別名「ブタマン会」と称される。「ブタマン会」は毎年正月に開催された。集会の場所は当初の伊藤医院からブタマンを作る中華料理店に移動したこともあった。「伊藤病院での何かの集まりで、ブタマンを食べる機会があり、その時、同窓生皆でブタマンを食べる会をやろうということになった」[71)]。この語りは、戦後の生活難を記録したが、さらにその様な集まりが同窓の連帯感を増進したことを反映した。小さな中華料理店の中で、同窓生たちはブタマンを食べながら、満洲記憶を共有した。「とにかく、ブタマンは我々かつての青春への、また瀋陽にあった満洲医科大学への限りない憧憬であり、同窓会の或る意味でのシンボルでもあった。（中略）私など、もともと精神科ということもあったであろうが、伊藤病院での学術講演会の講演は上の空で、あとで豚まんが食べられるという楽しみを目当てに出かけたように記憶する。そして講演のことは何も記憶に残っていないが、初めの頃のブタマン会での光景は今尚脳裏にまざまざと刻まれている。かくて全国の支部でも勃然としてブタマン会が誕生し、輔仁の結束と親睦と融合の役割を果してきた」[72)]。

さらに、「ブタマン会」という別名で輔仁会を表示することには、輔仁会同窓の集団に対する所属意識が存在するといわれている。すなわち満洲医科大学の日本同窓が共有する集合的記憶が「ブタマン会」という表現で反映されている。そして、「ブタマン会」の語りを使い、満洲経験を回想する次のような回想からは、複雑な感情が解みとれる。「『輔仁』誌の創刊号は昭和三十二年九月一日にしてようやく発刊されている。実に戦後十年である。この十年で会員は終戦の傷手から立上り自らの基盤を築いたのであろう。（中略）輔仁会の歴史に何ひとつ記録のない空白の時代である。そうした空白を

71） 熊田正春「戦後輔仁会の功労者伊藤先生」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）2−8 頁。

72） 註 71 に同じ。

埋めることを企図した本誌であったが、今やはり空しい努力であったことを痛感している。わずかに伊藤病院から起こったブタマン会、学術講演会、それを遡る善後処理事務所の追想が輔仁の戦後の歴史であって、それを演出したのは伊藤先生であった。ブタマン会が、26 年から伊藤宅を離れて中華料理店で開かれるようになったのは、日本の復興を物語るものであり、先生の御病気もさることながら各自が自立して金を払い、平等に食事をする時代を示唆するもので、あるいは一部にはいつまでも伊藤先生に迷惑をかけることを潔としない現れでもあったかもしれない」[73]。

上長に対する思い出

満洲医科大学の同窓生や戦後輔仁会の歩みにとって重要な人物についての語りも、会報・会誌によく反映されている。例えば、伊藤尹は輔仁会の活動に大きく貢献した人物であるが、彼に対して会誌には多くの記録が残されている。「戦後の輔仁会を語るには伊藤病院と伊藤尹先生とをまず上げなければならない。伊藤病院は渋谷区、原宿二丁目、河口湖、武蔵小山及び現在地と転々としているが、輔仁会が最もお世話になったのは、武蔵小山の伊藤病院時代と現病院とであろう。武蔵小山の伊藤病院の開設は 1945 年 11 月とのことであり、終戦後満大の引き揚げの第一陣が東京に到着したのは 1945 年 12 月で、伊藤病院としても開院 1 ヶ月後で大変な時であった。敗戦により母校を失い、全く着のみ着のままの同窓生が東京で成功している先輩の伊藤先生を訪ねた。伊藤先生は戦後第一代の輔仁会幹事長である（中略）数多くの後輩たちに嫌な顔一つせず、卒業生に対しては就職の、学生に対しては転入学のそれぞれのお世話をしてくださった事は、同窓生が等しく認め、今日もなお忘れえないものであろう」[74]。

熊田正春は以下のように述べている。「戦後混乱期の善後処理は伊藤尹先生の愛校心からスタートしている。学生の引き揚げと学業中途の学生の転入学などの問題について努力した」[75]。「戦後の輔仁同窓会は伊藤病院から始

73） 註 71 に同じ。

74） 前原裕「戦後の輔仁会を語る」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）34−36 頁。

まる（中略）満洲よりまた戦地より哀れな姿で日本へと目指して引き上げてきた（中略）満洲医科大学という一つの団体としての大学、同窓会の日本での基地は伊藤病院であった。そしてその中に戦後いち早く設置されたのが満大善後処理事務所であった」[76]。

伊藤は幹事長として学生生徒の転入学問題に尽力した。「本学のため同院内に善後処理事務所・同窓会本部を設置した。約五百名にのぼる学生生徒の転入学問題、ついで在奉天勤務職員及び復員軍人等の帰国後の就職斡旋等のため、伊藤君はかねて在日中の先輩・同僚と比較的早期に帰国し得た小数の教職員及び学生の協力によって、順調に解決し得た。その後、幹事長に推薦せられて、種々の問題の解決に奔走すること五ケ年余」[77]。

『追補』の中では、一部の同窓が日本人の立場で終戦直後の遭遇・傷痛について語っている。例えば「居留民会」、「ソ連軍の暴行」などである。熊田正春の回想によると「そんなある夜、それら兵士の一団は鈴木教授宅と我が家を襲った。教授は『無礼者』と一喝して、兵士隊の酷い暴行を受け、肋骨を折られた。私は幸い袋叩きを受けただけで済んだが」[78]。さらに「私たちは暴行や危害を避け、いや恐怖心も強かったと思うが、大広場の紅葉町組合教会に鈴木教授の家族共々移り住んだ（中略）かつて父が長春の公学堂長をしていた時の教え子である憲兵隊長呉大佐に訴え出た」[79]。その後、呉大佐の介入により、彼らは元々の満洲医科大学の住宅に戻り、帰国の日を待っていた。その際、鈴木道吉教授の帰国手続きに問題があり、従兄弟の名前を使って難民として帰国せざるを得なかった。その件について、熊田正春の回想では以下のように記録されている。「いよいよ引揚げの当日、集合場所で『鈴木教授ではないか?』と咎められ『う』と頭を振ると『名前は』と聞か

75） 註 74 に同じ。
76） 熊田正春「戦後輔仁会の功労者伊藤先生」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）2−8 頁。
77） 武井右馬之輔「伊藤尹病院長　本学及び輔仁会への貢献」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）8−13 頁。
78） 熊田正春「満大善後処理事務所の成立と学生生徒転入学の経緯」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984 年）8−13 頁。
79） 註 78 に同じ。

れたが、とっさに従兄弟の名が出ずに冷汗をかいたという」[80]。

新京工業大学の戦後同窓会誌は数多く発刊された。そのうち、新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌など同窓会総会により刊行された会誌がある一方で、専攻による各学科の支部会誌・会報[81]もあった。ここでは同窓会「蘭桜会」記念誌である『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌、北辰高く ── 青春の新京時代と追想の日々』（後『記念誌』と略称する）の中に反映された内容について考察してみよう。

『記念誌』では、まず「国立満洲工鉱技術員養成所」および「国立大学新京工鉱技術院時代」（1938−1947 年）の歴史を紹介している。その部分では、養成所開設当時の「要人」[82]および開設当時の教職員（学監、科長、主事、事務員、配属将校など）の写真を載せ、さらに養成所の概況、教官職員住所氏名録などについても記載されている。養成所が新京工業大学に改称された後、第一回卒業生を送る時の学長講演、さらに学術報告書、日系学生募集公告などの内容も資料として記録されている。

『記念誌』の第 3 章から学生の語りと記憶が掲載されている。他の同窓会では上長に対する思い出が記載されるのが通例であるが、『記念誌』では新京および満洲大陸に対する回想文が多く掲載されている。そのうちでも寮生活に関する語りが比較的多く目に付く。「全員が寮生活を送る制度はその最たるものと思う。『同じ釜のめしを食う』という言葉があるが、名実共にそのものだ」[83]。ある同窓生は寮生活の日課について次のように述べている。「（1）起床 : 朝 6 時、（中略）小広場へ出て点呼を受ける ;（2）体操（中略）;（3）朝食（中略）;（4）登校 :7 時頃、登校準備を整えて玄関前に集合し、各

80） 註 78 に同じ。

81） 例えば､応用化学科化人会会誌『化人』（1977−1997 年）､『化人会報』（1984−2003 年）、『母校創立 60 周年校友聯誼会参加訪中団感想文集』、機械学科『機友会　会員通信抄』（1991−1999 年）、採鉱三期会会報『杏花』（1994-2004 年）などがある。

82） 『記念誌』によれば、いわゆる要人とは星野国務院総務長官、貝瀬顧問、皆川所長である。

83） 木村宏（建築三期）・「寮の思い出、あれこれ」、『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌　北辰高く ─ 青春の新京時代と追想の日々』1998 年 12 月、142 頁。

科別に隊伍を組んで出発（中略）、徒歩で約 4km。この至誠広場から南に大同大街に沿って、新京医大、新京工大、新京法政大学が並んでおり、ずっと先に建国大学があり（後略）」[84] 特に、「点呼」については、『記念誌』で次のように記録されている。「さて、一応隊長の手前出した頚をまた布団の中に引きこめるうちに、再び快い眠りに誘われる。（中略）床を離れるまでは辛いが、勇を振るって、寮庭に出てみると、朝の空気は全く素晴らしい」[85]。

『記念誌』では日本敗戦の頃の出来事が記録されている。抑留に関する記述も少なくない。新京工業大学採鉱学科の同窓生は次のようにソ連抑留生活を語っている。「栄養不足と過労で、望郷の念を抱いたまま亡くなる人もある。下帯一本で脇腹に抑留者番号を墨で記入され、毛布一枚掛けてある遺体を月光の下、雪橇で森の中に運ぶ」[86]。同じくソ連に抑留された柴田四郎は、ソ連軍の強盗行為に対して以下のように回想している。「集結の途中で、出没するソ連兵に私物の全てを奪われ、またまた丸裸になってしまった。（中略）（ソ連軍は）お守り袋に異常な関心を持ち、徒党を組んで、用便中の兵士のお守り袋を狙った」[87]。

さらに『記念誌』では、留用技術者の収容所生活に関する出来事も語りの重点として着目されている。「私は留用技術者として 1947 年 5 月初めまで西安で働き、日本へ引き揚げたのですが、奉天で約 1 ヶ月半の収容所生活を送った。（中略）収容所の食事は朝と晩の二回、いずれもコウリャン飯に醤油をお湯で薄めただけである。私は引き揚げ者二十八名の責任者を引き受けていたので生活をどうするか迷った末、とにかく仕事を探そうと奉天市内に出かけ（後略）」[88]。

84） 有志七名（機械四期）・「四期生と城後路寮」、『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌　北辰高く―青春の新京時代と追想の日々』1998 年 12 月、148−149 頁。

85） 山岡詩瓢（応化四期）・「寮生活の一日」、『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌　北辰高く―青春の新京時代と追想の日々』1998 年 12 月、152 頁。

86） 二俣昌永（電気三期）・「異国の丘――歌と私のソ連抑留」、『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌　北辰高く―青春の新京時代と追想の日々』1998 年 12 月、241 頁。

87） 柴田四郎（電気三期）・「ソビエト抑留記」、『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌　北辰高く―青春の新京時代と追想の日々』1998 年 12 月、244 頁。

（2）中国人同窓生の語り

『長春工業大学中国校友記事』に反映された教育経験者の証言 —— 集合的記憶の観点から

『長春工業大学中国校友記事』は中国人新京工業大学卒業生の寄稿を編集した回想文集である。この『記事』は、もう一つの中国人同窓生回想文集である『回憶偽満新京工業大学』の内容も参考にして、1997 年に日本語に翻訳された。

まず、学生の思想や生活は、学生科の責任によって管理されており、学生はすべて校内で生活する全寮制度であった。「（前略）朝はベルが鳴ると一斉に起床、洗面ののち、戸外に集合、各隊長の引率で駆け足、早朝体操を行いました。その後 1 時間ほど、自習や新しい科目の予習など」を行い、「朝食のあと 20 分ほど歩いて学校に着き、授業を受け（中略）午後は 4 時限の授業ののち昼食、午後は 3 時限で、放課後は課外活動や掃除」を行った。「夕食は 2 時間ほど自習やその日の授業を復習し、その後舎監の夜の点呼を受け、就寝」した」[89]。戦争をめぐる中国人同窓生の回想によると、戦争が拡大するにつれて食糧不足になったので、学生たちは南嶺の街頭へ大勢で出かけて煎餅（テェンピン）を買って飢えを凌いだ。一方日本人学生はしばしば夜中に付近の畑へ出かけ、じゃがいも、とうもろこし、枝豆などを寮に持ち帰り、煮て、同室の学生に分け合っていた[90]。『記事』によると、新京工業大学の寮は 3 度移転した。寮は「蘭桜寮」と命名された理由は「蘭は満洲国の国花、桜が日本の国花である」からであるという。[91]

中国人同窓生には、在学期間に受けた教育は、常に「軍国主義教育」として再構成された。『記事』の中で中国人同窓生は、在学中に経験した「反満抗日運動」について、次のように回想している。「軍国主義教育は日本人学

88） 原憲正（採鉱一期）・「生々流転」、『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌　北辰高く—青春の新京時代と追想の日々』1998 年 12 月、238 頁。

89） 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997 年、28–29 頁。

90） 註 89『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、29 頁。

91） 註 90 に同じ。

生に、侵略と領土拡張の軍国主義思想を注入し、忠君愛国、絶対服従の武士道精神を培い、帝国主義の『大東亜共栄圏』ための犠牲になることに価値があるという観念を植え付けるためのものでした（ママ）。同時に、実弾射撃や行軍等の軍事訓練を出征準備のために強引に進めた。軍国主義思想を注入するために、毎日早朝、天照大神や天皇に向かって遥拝をさせ、度々隊伍を組んで新京神社に参拝し、また食事の前にはみんなに天照大神に感謝の祈りを捧げるなどさせた。その上工大の日本語『寮歌』は赤裸々に日本帝国主義の野心を暴露した内容となっている」[92]。

学生の制服は統一した規格があった。以前は日本の高等専門学校のスタイルに従ってリボンのついた黒い丸帽と黒色の制服であり、「技術院」とか「大学」の徽章のある帽子をかぶり、各科および学年・クラスの区別を表した。1940 年に工業大学になってからは、学生の制服は国防色のウールのサージ服となり、角帽とカーキ色のラシャの外套に改められた。冬は防寒帽と防寒靴をつけ、教練のときは戦闘帽とゲートルを巻いた[93]。さらに、中国人学生はそのような寮歌を通じて、軍国主義教育を実感した。『記事』によると、軍事訓練などは「教練科」に属するが、中国人学生は日本人学生と分けて訓練されていた。軍事訓練は毎週一回となり、たまに「軍人勅諭」を読んだり、たまに「歩兵操典」を学習したり、戦時期の日本の歌謡を歌ったりした。日本人学生は分隊、小隊、中隊と分かれ、突撃訓練や実弾射撃の演習をした。太平洋戦争が勃発してから戦線が拡大し、日本軍の兵員が不足し、1943 年から学徒動員が始まった。「最初の頃の応召者はまだ熱狂的なところがあり、神社で別れを告げ、光栄の気分に浸かりながら駅頭から送られてゆきました。のちに戦況が日々に悪くなってきたところの応召者は、顔から笑いが消え、元気がなくなってゆきました。日本軍は武器も兵力も尽き、とうとう『神風号』決死隊のような肉弾攻撃に頼らざるを得ない段階に達し、日本人学生の

92） 註 89『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、31 頁、寮歌は次のようになっている：歴史は遠し、燦として；日出づる国に、溢れる；興亜の使命、果たすべく；新に国を、興したる；我等が抱負、誰か知る。

93） 註 92 に同じ。

中には『人生 25 年』と口々に叫びながら、死ぬために前線に送られてゆきました。統計によれば、日本の敗戦によって戦争が終わるまでに、一期生から五期生までの日本人学生のうち 70 名余りが、ビルマ、沖縄、ニューギニアから南太平洋、サイパン島に至る戦線で前後して戦死し、5 名の学生がシベリア抑留で亡くなっています」[94]。

『記事』はそのほか「勤労奉仕」に関する集合的記憶を反映していた。中国側の同窓生は「勤労奉仕」を、「日本の侵略者が各大学の大学生を組織」した、「軍需生産のための「強制労働」」と表現している。『記事』にはさらに「勤労奉仕」について次のような記録がある。「［1943 年］6 月 14 日、工大の学生は新京神社に参拝の後、他校の大学生と共に児玉公園に集合、「勤労奉仕」大隊を編成、雨の中で閲兵式が行われました。6 月 19 日には東寧に向けて出発しました。綏芬河一帯は原始森林で、その中の昼夜を分かたず雨を冒して行軍、樹木を伐採し、泥土を除けて新しく道路を修築しました。各人がテント、支柱、毛布、シャベルルや鶴嘴、そして飯盒と何日分かの食料を携帯していました。晴れた日でも太陽を見ることができないほど湿気の多い密林地帯で、ブヨが飛び交い激しく人を刺し、熊や猿があたりを駆けたり吠えたりして、恐怖の気持ちでいっぱいでした。このように大変劣悪な環境と困難な苦難に堪えられず、途中で病死するものもありました。7 月 20 日になって、毎日の労働や行軍の疲労で力が尽き、長い道のりを一ヶ月の長きに往復し、この『勤労奉仕』は終りました」[95]。この他、1943 年、1944 年の冬休み、夏休みには、学校側は上級生を組織し、撫順、鞍山、瀋陽［当時は奉天］などの地区の鉱工業企業へ「勤労奉仕」と称して、日本軍の軍需品の生産労働や兵舎の建設に強制的に参加させたという。

『記事』で中国人学生は、そのような軍国主義色が濃厚な学府での学習の動機について、以下のような要因を指摘している[96]。「第一に、工業救国のために学問をしたい志を立てていたことです。当時の認識は、アヘン戦争以

94） 註 90『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、32 頁。
95） 註 90『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、33 頁。
96） 註 95 に同じ。

来、中国は度々列強の侵略と屈辱を受けたため、主として科学技術面や工業面で先進諸国より遅れていました。ですから強国となるためには工業を振興することによってのみ可能です。第二に、中国人学生は争うほどの気持ちで勉強し、弱気は絶対に示しませんでした。日本人学生との学習の上の競争でも、民族間の優劣を争う競争として体現しました中略第三に、中国人学生にとって学習できる機会が得難かったので、軽々しくこの機会を捨て去るようなことはありませんでした。（中略）工大への入試に当たって、多くの制限を受け、また多数の家庭には生活困難者もあり、公費で大学に入学できるようなことは簡単なことではありませんでした。第四に、学習するに当たっての障害は二つであり、まずは日本語で講義を受けること（英語とドイツ語の講義も日本語で行われました）、次に口頭での講義が主体で、基本的に教材と合わせた講義がなかったことです。（中略）そのため毎日の夜の自習は深夜に及び、ひどい時は翌朝午前2時をすぎることもありました。難しいとこにぶつかった時はおひやで頭を洗い、徹夜することともありました」[97]。中国人学生によれば、他らは個人で苦学する他に、先輩に依頼して、互助学習し、団結して学習の困難を克服した。

新京工業大学で感じた民族感情も中国人学生の集合的記憶に残っている。課外活動では、日本人学生の多くは武道や野球の練習、あるいは囲碁などに参加して、中国人学生は「バスケットボールを愛好していた」[98]。『記事』には、韓修玉という学生に関する以下のような記述がある。「かつて満洲国側は我々を『満洲国大学生バスケット代表チーム』として、朝鮮や日本へ試合に行かせようとしましたが、韓修玉らは『満洲国』代表になることはとんでもない民族の恥辱だとして、勉強せねばならぬということで参加を拒否した」[99]。つまり、韓修玉らは、課外活動の選択に民族感情を交えていたといえよう。

そのような環境のなかにあって、中国人学生の間では、先輩から後輩へ、

97） 註90『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、34頁。
98） 註97に同じ。
99） 註90『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、30頁。

愛国的な意識が伝えられた。これは主に左翼書籍の回覧や愛国歌謡を練習するなどの方法によって進められた。そのような方式は、大学当局から見ると「非合法的な」方法であるが、それ以外は新学年が始まった時の歓迎会や、卒業生を歓送するときのパーティ、公園での散歩など合法的な方法で行われた。「歓迎パーティなどでは、日本人学生が中国語を知らないという弱点を利用して、王伝久などは公然と興奮しながら高らかに『起て！奴隷となるなかれ人民（後略）』（義勇軍行進曲のこと）を歌い、載鴻范は悲憤しながら『我が家は東北松花江の畔に在り（後略）』を歌い出した」[100]。中国人学生の観点から見れば、学校側は団結を軽視し、その団結に反対することは民族抑圧のための主要な施策であった。つまり学校側は、「12·30」事件後、中国人学生はすべて「思想犯」の後援者であると見なした。『記事』によると、中国人学生はそのような差別と闘った。「私たちは常に中国人の校友に不利な徴候が表れないか警戒し、日本人学生の給食差別の下相談や、ストームなどするような状況をつかんだ時は、先輩校友たちは互いに通報し、対策を研究した。また日本の上級生が事件に託けて中国人学生を説教しようとした時は、先輩校友が全面に出て交渉にあたり、『日満親善、民族協和』のスローガンを利用して中国人学生が自分たちで処理することを彼等に要求した。そして一致団結して校友の人身の安全を図った」[101]。

『記事』は、中国学生間の愛国的な感情から生み出された団結と感情を集合的記憶として記録している。「同窓生の関心は、入学試験のときから始まった。九期生の場合、予備試験の合格証を受け取った後、先輩から入学試験が実施されるときになると、先輩の校友は長春［当時は新京］駅まで迎えに行き、旅館を探す世話をしたり、気候の心配りや、入学試験への自信を持たせ、試験に合格するように前祝をしたりした。新入生は入学後、毎年みんな歓迎会に招かれ、学校の政治状況や学校の規則、注意すべき事項、学習に励むべきことを紹介されて、将来、祖国に報いるための準備がされた」[102]。すなわ

100）　註 90『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、51 頁。学生の中で主な転唱された歌は「蘇武牧羊」、「満江紅」、「義勇軍行進曲」、「流亡三部曲」、「大路歌」等である。
101）　註 90『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、37 頁。

ち、中国人学生の人数は少なく、ともに勉強した時間が短くても、その逆境の中の友情はひときわ忘れがたいものであった。『記事』は以下のように述べている。「当時は大変困難で、不幸な境遇に置かれていた。我々は『三等国民』であり、また『三等学生』とされていた。中国人であることが明らかであるのに「満系」と呼ばれ、政治上の圧迫や行動上の監視を受けた。中国人学生は、宿舎も分けられ、思想や言論や挙動に至るまで、舎監や日本人学生の厳密な監視を受け、書籍や日用品など常に秘密捜査されていた」[103)]。

愛国感情に従って、「軍国主義」に抗する「反満抗日」運動が発生するのは自然であると記録された。「12·30」の大がかりな逮捕以後、警察や特務は常に学校を訪れて「思想犯」を捜し、政治的迫害による恐怖心を植え付けようとした。また日本の軍国主義教育は、厳しい階級概念を学生の頭にたたき込んだ。「街頭で上級生に逢えば必ず敬礼をし、上級生はいつでも下級生をなぐって、罵ってもよかった」[104)]。日本人学生はいつも「満系学生」を侮辱し、叱責してもよかった。中国人学生は常に身の安全と民族の尊厳がおびやかされ、精神上の長期にわたる抑圧を防ぐことができないまま、苦悶と悲憤の状況が続き、毎日のように抗日戦争の一日も早い勝利を待ち望んでいた。そして、彼らの集合的意識は「必ずや団結して共に国難に向かい起ち上がるべきである」[105)]。というものであった。

『大連、アカシアの学窓――証言、植民地教育に抗して』に反映された高等教育経験者の証言――個人的記憶の観点から

竹中憲一『大連、アカシアの学窓――証言、植民地教育に抗して』は、64名の中国人植民地教育経験者に対してインタビューを行った。竹中は、彼らの教育経験に従って中等教育から高等教育まで分類し、学生らの個人的記憶を考察した。そのうち、満洲国高等教育経験者は旅順工科大学の張大鈞、奉天工業大学の陳海震、吉林師道大学の王文学、新京政法大学の劉志明である。

102）　註 101 に同じ。
103）　註 101 に同じ。
104）　註 101 に同じ。
105）　註 90『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、36 頁。

彼らには、満洲国の学校で行われていた神道の儀式および「東方遥拝」に反発する感情と、それに対する中国人としての民族感情が生まれた。これは、中国の建国大学同窓生の回想文集『回憶偽満洲国建国大学』の中に反映されたイデオロギーと共通する側面を持つ。一方、個人的な記憶と出来事に関する観点は異なった傾向を有している。張大鈞は最初満洲国の留学生試験を受け、成績が良いので、「日本のどの大学でも無試験で入学できる資格を獲得した」[106]。彼の担任教員は「満洲国の最高学府である建国大学」[107] の入学を強く勧めたが、張は卒業して満洲国の官吏となることに抵抗感があったので、結局旅順工科大学に入学した。入学して感じたのは、「建国神話」などの思想教育から解放され、自由な雰囲気の中で勉強できたことであると述べている。彼によれば、旅順工科大学では学科選択などに一部差別があったが、基本的に民族差別はあまり感じられなかった。日本人学生のほとんどは日本から来た学生で、植民地に特有の民族的差別感情を持っていなかったので、素直な気持ちで付き合えたという。中国人としての張の反日感情は勉強に向けられた。「成績は日本人学生を抜いて、いつも一番であった。成績がいいと差別されることもなく、教師もかわいがってくれ、日本人の友人も多くなった」[108]。

陳海震は 1945 年奉天工業大学に入学した。奉天工業大学は日本人学生を主としていた。その大学は、日本の高等専門学校のレベルに対応し、日本人は三年で卒業、中国人は四年で卒業となった。陳は応用化学科に入学した。授業はすべて日本語によるもので、英語、数学、物理、機械などの科目があった。陳の回想によると、彼は「その時ハルビン工業大学出身の張という先生から科学を習った。張は時々陳を自宅に招いて、日本の敗戦が近いこと、新しい国造りが必要なこと、科学技術の重要性、日本人の中にいても中国人としての誇りを持って行動すべきことを話して聞かせてくれた」[109]。こ

106） 竹中憲一、「日本人学生に成績で勝つ」『大連、アカシアの学窓――証言、植民地教育に抗して』明石書店（2003 年）、257 頁。

107） 註 106 に同じ。

108） 註 106『大連、アカシアの学窓――証言、植民地教育に抗して』、254–258 頁。

れは奉天工業大学で受けた最初の政治的な影響であった。さらに陳は寮で中国人同窓から反日的政治運動の宣伝を聞かされた。「大学生になると、政治のことも理解できる様になっていた。寮の同室に何という学生がいた。最初はあまり話もしなかったが、知り合いになるにつれて、日本の中国侵略について腹を割って話す様になった。何から誘われて政治グループの学習会にも参加した。学習会で上海、北京から送られてくる社会科学の本を読んだ。学習会では、何は勉強して新しい国のために役立つ人材になるよう呼びかけた」[110]。そして陳も反日的な感情を勉強に向けた。彼は睡眠時間を削減して応用化学の勉強に没頭したという。

王文学は 1944 年に吉林師道大学予科に入学した。王は在学中に「勤労奉仕」で吉林省の通化県に行った。彼の回想によると「軍隊の監督下で山に入り、一ヶ月半ほど作業が続いた」[111]。作業の環境は悪く、卒倒するものが続出したが、それでも軍需品の生産ということで、強制的に働かされた。王は通化県で日本の敗戦を知った。「民族的抑圧から解放されたという喜びと、大学での勉学を中断しなければならないという気持ちが入り交じった複雑な感じであった」[112]。彼は通化県を離れ大連に帰ることにした。その時「通化県から撫順まで列車が出ていたが、撫順から奉天までは列車はなかったので、五、六冊の授業ノート以外の持ち物はすべて捨てて、奉天に着いた。奉天では日本人学生と間違われ、集団暴行を受けそうになった。」王は終戦直後奉天の混乱的な状況について回想している。「奉天に収容されていたアメリカ人が暴動を起こしたり、日本人商店が潰されたり、道を歩いている日本人が襲われたり、着のみ着のまま奉天に逃れてきた日本人で収容所はごった返していた」[113]。

劉志明は 1942 年に新京政法大学を受験して合格した。彼によると「政法

109） 註 106『大連、アカシアの学窓――証言、植民地教育に抗して』、268−269 頁。
110） 註 106『大連、アカシアの学窓――証言、植民地教育に抗して』、269 頁。
111） 竹中憲一、「吉林師道大学に学んで」、『大連、アカシアの学窓――証言、植民地教育に抗して』明石書店（2003 年）、274 頁。
112） 註 111 に同じ。
113） 註 111 に同じ。

大学は学費免除で、給付金として一ヶ月二七円が支給された。日本人以外にロシア人、モンゴル人、朝鮮人も交じっていた」[114]。劉によれば、新京政法大学では、法律の勉強より「精神教育」が強調されていた。「毎朝『東方遥拝』の後、時局講話、軍事訓練が行われ、身体の弱かった中国人の友人が冷水浴で重度な肺炎になり死亡するという事件も起こった」[115]。彼の個人的記憶によれば、終戦前後の思い出は、以下のようなものであった。「1945 年になると、日本人学生はほとんどが学徒出陣し、中国人学生 30 数人だけになった。授業はなく、毎日が『勤労奉仕』」の日々であった」[116]。彼は「勤労奉仕」の経験から「日本の兵隊の中にも厭戦気分が広がっているのを知った」[117]。

（以下次号）

（かん・みい＝本学民俗学研究所研究員）

114）　竹中憲一、「法律家を目指して」、『大連、アカシアの学窓――証言、植民地教育に抗して』明石書店（2003 年）、280 頁。

115）　註 114 に同じ。

116）　註 114『大連、アカシアの学窓――証言、植民地教育に抗して』、281 頁。

117）　註 116 に同じ。